神小山鬼雜

狂言輯 四

和書門
類 二八九二九號
八八函
四架
四冊

内閣文庫
和書
類 二八九二九號
四冊
一九九函
二三架

内閣文庫
番號 和 28929
冊數 4 (4)
函號 199 233

裏面記載のない箇所は省略

国立公文書館
National Archives of Japan

壱 連歌毘沙門
弐 かくれ笠
三 察化
四 千鳥
五 真奪
六 太刀奪
七 二人龍支
八 附子
九 粟田口
十 金才
十一 籠てう
十二 志ひり
十三 ゆゝ海未
十四 蟹山伏

十五　腰祈
十六　神なり
十七　清水
十八　萱式(?)
十九　鬼のまゝ子
二十　吃
廿一　子盗人(?)
廿二　合せ柿
廿三　毘沙門
廿四　長光
廿五　靱猿(?)
廿六　地蔵舞
廿七　重清

連歌毘沙門

是ハ此あたりに住居致者でござる今日ハ初寅でござるに依て鞍馬へ
参詣致さうと存る又毎年申合て参る人がござる程に是を
誘うて参らうと存る頼ふ(?)来ても内に居らるゝか誘ひに参る(?)
御座(?)の事でござる程に(?)居らるゝか(?)イヤ手前も程に是しやう(?)
先東門と先ハ（是ハ猫の神(?)のござる一して詣る参詣とやら返門の）川来ても添ふて致て拝備
扨御参詣ハ今年も参らぬか(?)　中々拝備しで御座る
先ず一夜と能ら居よ（参人たある）ハアし何事有難や多聞天より御福
成まいか(?)　中々何事で御座る　さうハ通夜致(?)
をお取下て有かる(?)　只今多聞天より御福有の実
下されて有(?)　夫ハ目出度う申て御座るは私ハ
めでたい(?)　イヤ是ハ私へ下されたる御福で御座るに依て私もいかゞ(?)
仮今私へも下されたれ共(?)　是ハ私も毎年申合て参ると遠ふ(?)申てござる
其儀なら連歌をしよう(?)　当来(?)ハ下さる事(?)是非も無(?)配分致て下されい(?)
先ず好く(?)為す(?)句を致(?)　夫ハ連歌を致て上ていへ成ふ(?)
先二所(?)をわけ(?)成(?)　夫ならば(?)そのを(?)

なう〳〵出合にならしませふ　何としての御ざるぞ
何とか能ふ座ふぞ　夫の能の座ろし　扨もこれは満足ふる　早速御しくだされ　千鐵かへは
毘沙門の御して福有の寳し開かにとなしませう　米は一振し能の座る哉
うかゞひ申て百足懐ろしし付ませふ　毘沙門の福有の実し出るかふ
吟して見ませう　能の座ふは　イヤ仏殿の内か震動致し異香薫
ムか夜さうれふて百足懐ろり　心得ました　毘沙門の光り
じ只今ふ始かし御座る是へ出て御座れ　是へきうひ申うふ
ことも御門ての福ふ敷るされよろ殿ひ至し参り　汝らは好む知らず　仰
出立せられしはゞ今なれ出方ての御座るぞ
ねませぬ　是は毘沙門天なるか毎年し奇特出ることを遥ふ何て
楽しふおれてござらしと参ひ福有寳をも與へられは豪なる
こう連れふし年の連歌をしてくらう云うしたも配分していこらせうしと
思ひ多門天は是追居ましおいて有そなよ　ハア是は有難し御座る先
扨は是除が與て遣されし　宝物は康机と呉れ　畏て存る御家
机とにまかせられ　心得ました　ハア此康机てかける　夜ゐ入とも

是へ出たれ　畏ての御ざる　汝ふ毎年し奇特出ることを
まぶれにハア　さらばは宝物の有の寳とも配分そとしてとらふ
せしし是へ出で参　イヤ私の方てはかた御ざらぬ　夫なら是からの方に
有ふ是へ出せ　イヤ私の方ては御ざらぬ奴　御茶の前にさて進ぜ
のてへし知ふそふ怪ふ汝よ渡ん祢は是へ持ませ　其錢か
らは上ませしハア有の実てしうなる　扱もしてれは見るほど
義東の有の寳しやまて汝等ふ女房は知ぬ　是はいかなる
夏拆角下されぬし鬼とこれ之させてしゆしゃ申か有揃ていかなる
何年配分なさけて下さろうな　是とはまさし宜配分として遣ふ
せし何ぞ又物かあるか　イヤ何も御座りませ奴　汝も指
ふぬか　私もからう満足奴　然し汝等は不審これ若しや
支那ふは是非に及で此共将て別ゞしてふせしか将て見何さ
なふは定配てしさ配るて有しか其附分に研貨は出たが
祢の事とせしませし　是もさふ事是と南蛮の鉢とふ　砥貨
て請ふ鉢ていなうか出来　ハア　いてし有の寳と見らん

ともに竜霊の絲とともに来し其中より　さら川くりはアニツ
小判川と先功とせし　最て乃ある　あしてもさせ
ちゃ流え流しと　備り義来れ有り比実て跳ぬ宝川と是
は毘沙の徳かくさる板右兄弟の連予は、あし　毘沙
門の福あつの實し用ゆかしそ用ゆ　百足喰をさせ
毘沙の主と我の方りし沢さ余餘　悪魔降伏ぬ拂ふ
辞と沙子とう沢り　あふし南えりやし　凡家にも福
後ひ也　ほしかる事て従を有き　とて兜を説
て沙小とふ世是迄なりとて　毘沙門と　いし　共に手は沢ふ
てれとおさら有りけ被

隠笠

是は昔ありに住居致せ者ありける天下治り目出度御代てつまれ
此者の尋ねしてすしみ法寶競は勝しいるてるやり失ひ付合衆は目の前
の寿物の有る宝物を競させふまてしとの事ててる来る其の道具の内に
目にみ寿々寿物乃ある宝物ありける太前蔚兵と傍ひし所ふと帰るやり
太前蔚左衛門とやれ　ハア室の框の如く云有板敷へ上りて傍て歩行脱衣へすかし云は松田含着
て何にとも伝世ね方と常の笠かつまるに依て是こそ隠笠しやしや寿有
代物をと取うしたる噺と内室の物寿ありの　是と居まれる　さ所にいと
そは寿藥れの逃け出し隠室の框内より手御と後末にこのし框は
おしても依て室でもすれは其時の隠笠でるまれる　おし出てれ先さか　ひろふ
おきさふ取云て勢有れ
まさし　夫の他のふ　南無寶し　失へて私他し有りせり　夫が　は驚き
此先度より三から代物はいの程てつまる　代物は方迄てお甲あり　さて
欲高直まいつまれ是此衆は高きさますれ小依て万丈と求めまさせ扨是に　失へは
目の前に寿物の有しいけいは我れよて此まり　云は其事しやその
笠をと忍ましい人の目に見之れり寿物て払り申す　夫は寒さ寿特れ

宝でござる私も奇特なる度のやうに仰て頭に着てござらせて下
されい　イヤし夫は主を思ふて扨して其如しうござりまする〳〵併余り結
なるお主ではござるやによつてやはり着さうと存じまするて
拙者さへそ　先は汝調法の宝でござる其様なら私が若お主に
下されたて給はれ　必ず着さうぞ　然らばすまし何と成てお主
すまり　田舎者はと云ふ者は楽が　是を居ります　今はすまいとも
姿は成へぬ目でおぢやる　田舎の者が　汝も成ぬそれ鼻の先へ来
るが是に居ますぞ　田舎のもののおちやいてござるぞ　是と押りますぞ
田舎のし　汝も成ぬそれ何度は笠でござりまして成へ　田舎の
衛田舎ぞ　何しらへかまぬかぬか　さあいはずれ姿は成へぬ目ぢや
候ひ先は奇特な宝でござる扱私は奇特ととござりまして依てかふ
弥こそりませぬ　庚甲おとらが　さあいし　能おり合ふ
八ア嘆く嬉しやあれ嬉しと懐て出ござる　宝ノ槌打出シ庚ノ苦テ岩ノ笠掛合笠ナト云テ主ノ不書ナト云時ハ人ノ云フ事ヲ叶ハヌト云テ咲スル
夫ならば蓑ふ笠へおこせ　畏てござる　南無三宝し　夫てこそ
然らさる　備是に眼の前に奇特の有ないふ依れ真也　ざるい其

来てござるぞ笠をお主は人の目に見えぬ奇特でござる　夫なら調
法な宝じや某も奇特な成程汝着て見せい　畏てござる　能
失はぬしとおりや宝で其主がござりまするぞ　又余の人がお主へまいる
様子がないものは汝しておよるこおに着さするがお私が見て上げませう
夫は調法な宝じや先試らればこそ極とめて見い　畏てござる
おまさせい　然らば何と見へぬか　是はいかな事　人の
御姿があり〳〵と見ゆる来は如何なるぞ　是ぞいふ　扨ても
拙者見へぬか　某はよう知つて参る　是と居るは　何と太郎
が世に出たか奇妙な事じや　是は調法な宝じや　誓言
の先へ来て寄るに宝は笠と夜て見へし　扨て〳〵人へエイ扨て
法方　何と見へぬか　おまへは汝世に姿は見へませぬ　夫は調
法な宝じや来も何卒して奇特な成物じやが何とした物で
有ふぞ　何としたものてござるぞ　イヤ此笠を汝に貸ふ
此依て着て見せい　貸して御ざりまして下されいて暇して口ござるな
何てこの方は必定てござる是は只お前へ納て主ませう　中々

かしく [illegible]

筐をそへ[illegible]まいらせ候　ハア[illegible]

主の[illegible]

[illegible]申上候　[illegible]

御[illegible]へ[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まてしハ此諸檮ル室しやといふてハ寄物なといたし候ハ宝てハ御座ル其
儀なくハ世間へかくれなき事ニ兼着て居ませぬ　イヤ々世間さまへかくし
候ふまいでも主ハ存して居る是ハ只々臣蔵へ納めて置ませう
先借てしまひ候ならハ是非に及ぬ此節中寄私に差て居ませぬ
イヤ々勝手ニ金銀など出しておさせられし物と私に下さる事
中寺の宥物てござる是ハ只臣蔵へ納めて置ませう　先すて
しハ子諸檮ル室しやといふて寄物なといたし候ハ室てハ御座ル是
非とも寄物いたし候ニ付て此ニ申すかハ差て居ませぬ　愚ていふ事なと
私か着まして居ル候ハ夜返さいふと存しまして是ハ臣蔵へ納めて
置ませし　先すてし諸侍ニ一旦世間へ相と存しけ之に掛しや
是非とも差てござい　すへいとう有ても差上てござるかハ
申し　其かハ清しいたし向て居てかさる方
ある差よ　愚て居る　夫ハ皆人ゆかハ　イヤ夫ハ級を読
まをね　ま申す差よ　心得申しす　此名に於て何時追加之

宗化

是ハ世あかりに住居致す者てござる某あかり此度元し寄合て連歌
の初会催とぞ存じてござれハ門追日也当てござる田舎の由て出座
また誰も宗匠に頼かあるも御座らぬに依て古師匠など呼出し
御父御せなとはいふて此る誂に此試略おひも此度のでも古今の稽古
今からお為へ世間へ伝父御様とよびまして参る　愚てござる　いて云ふ
ハ久しく御便りとも落りませぬか誂へ世へ参し事も存らぬかさる宅
また当りの若い元し寄合て連歌の執心海とぞ存じてござれハ門追日也
当てござる田舎の事てござれハ誰も宗匠に頼ましき者も御座らぬに依
何卒御存かあるかれて宗匠となりてござりまし何卒ハ頼しでござる
といふて呼ひまして参る　心得申しし　依京あの伯父御様ハついし
御隣の若衆しやに付て寄御隣へ参しと候かれしかハ去日や十日ハ返答
して又お隣のあつかい参侍して参る　愚て御座る　あるゆけ
御待申しし　ヱイ　ハア極めし此方の数ハ人の為に物を急に出す
らるしあすハ御座る事ハ今から為へ世間へ伯父御様と呼申して参れと

如何なれバ先急で来り寛ゝ来も同し都と見物つるしてたんしと存る
所ハ旅宿ハよい所でござるに依て夜分ハ大成宿り取りし見物致
さふしなから都通りありて中〻外旅中女中よしイヤ何角云国ゞ是ハ大和
都へ上り参る又田舎といふ遠方へ参りてつとおれ
途中雑事多りに取りし我元何者りし遠近も捨かの風あまりありつし御座
尤ハ安念成事と申し伯父法様ハ其の様成出方て示と云ふ元と出来るとも同
以下来る先かふ遠くの所と何事ハ御手遣ひまいり何とかしく掛てかけふそれ
流石ハ都てるさうおらし見る事に初手遣ぬてゆい咲いろいろて歩もけい参りそうと
見へてさうぶハ能き弥も甚あつう小ぢ咲そ何てし乗り嗚ゝそふ許さうてうち
乃親ゝ人の伯父法様のお宿ハつまらぬシヤア　是ハ浪中をたずね上る
分も迚ゝ大成者でつ参らあれ〳〵田舎者し見へて御参々で何もしや　然
当国て見へしはら　イヤ噺しきこえとうちに親ゝさ人の伯父法様の
お宿ハうさうぬらシヤア言葉ても尤る風雅そ何し上京へ参り噺し
こゝうりにここらに見親さゝ人の伯父法様の御宿ハつまらぬら　イヤ噺し
さて中　ヤアしここらのるてゞゆうゝ何事でるやるぞ　いろ[illegible]もそ

左様の事しや御宗旨中々なかなか此度ハ浪中と何もどこ何もし云て
お歩りきや申さそ　私ハ田舎者で別に御宗ハ中〻まぜぬまゝ手出見あれ
イヤし御宗お申しやうふで答むるてハおり大成今お申てハ御来
それしいふ不案内てお尋申　只今申さる事の　十く　私か事
者の伯父法様のお宿をと尋て歩りきまする　儀去御伯父様をと知ては
所あるら知らいでおらぬ所であらり　是ハ都の人の御ともも見へぬ事と
御たらぬなはで居れいつ〳〵けて来れ見存せぬに依て此りろく
歩りきまする　是ハ此元の混りすれバ汝ハ在郷者でいなかの
私ハ在郷者でうさうさうすこといとれてるてやる　汝の尋る親
うへ者の伯父ハ対元しや　ヤアし伯父法様ハこ尊々でうちるか
共し　何ゝ是ハよい所て大月中[illegible]り備てつゆうらる度許て
須目にかゝらバ何ホ方量も知らぬ者でつ申ふ　寛ゝ尋るで
尋ふ依々ハ何しなふて世間さぞ　只今申りますうも別なる
申でもつ申ぬ此親らし左の使に来り備先　何しいふておち
おまいてし親らし宿中さうおまうす久ゝりお使りもつ申ら始め[illegible]

せう事も御座らぬ夫ならハあつけもないへ兄と申合
連歌の執筆をいたし嗜んで居られまするハ日頃から仰られて居らるゝ
田舎の事で御座れハ詩も百首も通に成ませぬ夫でも御座りませぬ何卒
うかと御座りませぬ達て宗匠を勤させて下さりませと申ハ
御座るとしや申て居りまする　先ハ道中安い事なれと一夫向ハ隣の
存じまする　備ハ縦にもならぬ伯父御様で御座る隣の
者も何の甥子伯父御様ハ律義にして隣の家ハ御所にも御仁にて御座る隣へ入
し仰ても是ハ之曰や才曰ハ退屈いたしてあのお隣のあいさつに
依して来いと申付ましてござる　文総迄参つて右の様な
らいいても言ひまする　先ハ示しまする其儀ならハ先づ那へ参つて
イヤ是ハ案内者の為に母のかけ　このうち御先へ参りまする
丈の供ハ、サアゝ参りませう　参る　我家にも中通は
よい事で御目にかゝりまする　是にあまつて能芸に達して
方量もない事でござる　参りまして　扨役ハ遠いが
今少してつかつ参らせませう　イヤ何角中内に果ては
御座る

是見　中々是ハ何と致して是ハ其中々是世話様な
ハ好く　中敷なく参りまする貴方の拝借者の貴様の
イヤ大命冠者の貴様ハ大命冠者の貴様　御座る
ヱイ貴様ハ其分貴様でござつた　ヤレゝ太儀やし　備伯父御様と
呼ませて来ました　まんまと申しました参つて参りました　先ハ御座る
能芸ハ母と老いて是に其外能くござる　丈ハ参つて御座る
伯父御様の御宿を教へて申して中々参つて何で無事な所でござる
いかう未熟に有つて　丈ハ何やら事ていかいて見上ゝと下へ下へ
歩ても帰られハ伯父御様のせわをさせられて居らるゝ　何やら伯父
ら迷つて　先す　先ハ合点の行ぬ事やら何の伯父御は其様に
帰りなされる人でいなされる故どうなる事と存する　中々法門外に帰り所
丈あつハそれ承つて祖に新敷ハ居らせて見ろ　果てゝ参る
口を存して　皆殿へ　中あまりて申さる　何れが　先
果ての事る　汝ハあれと知て帰つて参る　知られて帰て参るから
伯父御様しやれ行て帰らせて参りました　是ハいゝ何事何れ

於に隠れもないこぼんの祭化といふて太の水破じや　何の破
ぞし　水破なしは継と掛まし　先まてし　若殿らぬ
申てござる　イヤしあの弓を以とあると荒立ましは印て仏とも云との
じやといふか何てござ門に振出して海さつぱり遊せ　夫はつ頃ねれ
てござる　己ら何と知て手に遊せ　畏てござる　爾らは何人
何事じや　其様ないらぬ事言ぬ　当るは　今難き人
の持彩ら尺させられてあまりは猶に隠れもないこぼんの祭化と云て
太の水破じやし何ぢや夫に依て名破なとは継とおふと云るぞ
あの扱の者共と荒立れは印し仏とも云がれ何て一ツ振舞て海さぞと仰らる
御座りまめ　其も田舎に帰りと三人指て居るに依て夫の方らの噂に
来らねと思ふてまし門違なら所ふ　先方の使者申し上難き様にと戻
いてはオ芸ら迷惑致び者に御座らぬ　夫なら通て下さい　通
らしめ　必ず不案内てござる　初対面て御座る　私も田舎に帰りと
三人指てござるに仍て夫の方らの噂に承りましたて門違ひを致
て過び面目もござらぬ　左様の事は時に有事てござる備へ私も

是居ておゐ時申しふはござる　先勝手に無用の事を仰られて備へ
まする是へは太郎冠者と出し遊ばせと後りそしいさせし為　様迄
らんなれ　太郎冠者是へ出て御使者と申せ　畏てござるイヤ申しあちこ
御申さ　私の申さ　先下におかれ　此者の依是は扨て
形ら　木に執ゐし人の伝鋑ておりまる　扨し結構な事じや　誰様よ
伝物好とおまさらしに依て定て色に成物に好まれて有り　中し
まてれ物か毎ありし　中も何に好まして　中中も小鳥に毎り
何しや小鳥は　木に　小鳥といふも夫の内は両鳥抱しやら小鳥の肉
ても何に好まして　小鳥の肉ても右くびの様様有て夫ら鳥しやら
数の中をと知らぬへはチヨイちらちらへはチヨイし抱て西からは帰鳥しやる
まで何らむし忘まして　夫は何て有ふぞ　何しても云そうろ能くは忘なぬ
おなれし人は私は科の知ぬれとの々と何として来た者ると　のじや　小鳥
何と云もしてふ　太郎冠者とを出し遊て御座るか何の申とかのか有ふと仰る
とを云て一ツ松の　何申て有まする　先にござひん　何しやござんす
中にこで凡人はむさとしらぬ方すといふまらの有抱ら夫は定めて

鷺でござる　コハ其鷺でおぢやるか　注□を□て　昔は鷺奴でござるが
イヤ嘘ではござらぬ　いて来るは　あれいでおぢやるぞ　どれ何事でご
ざる　彦(?)成者はむさとして鷺の事を云ふ事か有物か
忘れまじ　いかにもそれはさうぢやが　其上小鳥抔に好ぞ　最
事か有とものゝ今度同じ様ならは外聞もよからぬ　鷺になりまし（た）
てござる　とかくしどもない事は　逃物で能ござるほどに　此場
御しき　むさとしたる事をいふまいぞ　最早はやる方か（なし）
何事じや　叱りばともよい事をと叱りました　何にと叱りました
鷺なと云ふ事をいふて叱りました　是は定而叱りばともよい
事じや供何に好かれ　今夜は私が方に鷺を好ます　何じや
鷺ぢや好いて　中々　鷹といふものは歴々のすいて汁となさる
しやうといふもの　ここと言ふとも　今朝も青時（いて）千鯛鶏雉
節なとと申ては来ぬ　あの鷺がその様に物とする
升し　むさとした事と申（叔父）又呼はわいて来る　アラ
いてござりまする　さら嘆へさ呼はせまする　あの様な鷹は外の

聞よふ雁鷹にすくしいふ事か有ものか其上鷹からは其様成振□
と申さそ　御台所の鷹は七羽もふろく成者をと兎て来りたし
あまいは背ゐる様に依て異名をと高しといふ其上方のものがゆえ
れとのとむれてあけが来逃も在とく是からは乗芸からは
すりや口真似をとせい　口真似をといふ事かか　升し
最ておぢやる　御退屈にござる　落りしてある　帰りてござる
猿もおれとのとしいぬ逃帰して　面目もござらぬ　イヤ昔恋
お仕来てござる　大郎冠者御出をといせ
是より狂口真似同断

手香

是ハ此あたりに住居致す者で罷在る今晩俄客がござるに仍て太郎冠者を呼出し毎の酒屋へ酒をとりにつかはさうと存る誰かおるか汝を呼出す事別なる事でもなし晩程俄客が有に仍て毎の酒屋へ往て酒を一樽取て来い 畏てはござりまするが併毎の乃通の表を流すをねに仍て参つたれどもなかなかしは致すまい 其通ひの表を通し此ハ無用にして又此ハ酒屋の亭主と相口しやと云に依て面白からうと云て一樽取て来い 併ハ通りに直すところではござれども仍ハ川より舟て来ても太郎冠者一ッ呑めた併ハよしもたせ是ハ清免致て参れ 皆迄ハ仰られそ夜ひて参り参らうハ此口切をとらせらしと ヤア何と仰らるゝ今度取て来るのは口切をとらせうと仰らるゝか 扨ゝ 其儀ならば畏てござる 内も開か宴穏に於て候ぞ 名ました エイ ハア情もしたちの熟てゝ人の知れむさうしたなれハござるまだ内ハ通の表ても流さって中にて酒をとれて来ると仰られた是会参らうか参る先急で参らう 訳参ても酒をおきさハ然る所が扨は挨拶呟は参りはせ無るにて罷在る飛ぶ面白からうか中々ござらぬ一樽ちらしたとさねるうちに中るまいや参る程に是しや先案内を乞う 誰の イヤアお入来る致待てござる 失ハいて極れ

来てゐなる　内ゝ此通の表ハ何とゐりまり　是ハ近くゟ急度筭用致しませふ、
今二三日待ちくれてさればゝ　和尚様の両三日しもおふと御あひし急度筭用さしめ
何ゐ扨急度筭用抜しませう借失ハ唯今参らも別条なくてもゐさうぬ今晩餓
容ゐゐなるに何て毎のよ酒と一樽おこ似てされとや雑用してゐゆる　是いれ
ゐ間しの至乃毒も漁さずと云てよふもしこ振れなひ云てあいさうを支しや
おゐみ此ゐ宿仰しましとなて當座の代りハ持て参り候しく　何しや当座
乃代りハ持て来さ　中ゝ　イエ失なふハ何方へもゐるも同支しや今出しておゐ
そふ先支お待申し　ゐまりましく　嘸し是ハ餘所へやると云て念入て詰て遣
なまた跡蔵ゐ当中の代りと持て来るとおもゐゐ仍て出いてやる是を持てゆ
しめ　是ハ忝なゐる中其ハさんで居るに及ハまぬ　中ゝまゐて居るに及ハぬ
失ゐゐハ訳ゐ持て参り　ハア樽の代りハ　アゝ是ゝ代をおとさしめ　ハテ此樽の代
を遣て行しゑ　中ゝ　唯今進し候とゝハテ合點の行ぬ仰
としゝ志らぬ申丈仰を落ていゆるぬ　イヤし此樽ゐ何も落てハ無
ゐゝ丈く頼みゐ者ゐ方より請取来ハ請えてゐされた條り開りさん柳の鴬へ去
よるとのもとて参るゝ是を持ていて只今代を持て参ふ　イヤし其代りゐ此持て

来てこて此樽を持ていゝなよれ　ヤアおゐすゝい空へぬるゐ此仰しゝ是参り初て
とゐ酒ていおりし一寸斗ハ代りゐ也と申しきもくれてもよふゐ存じふ　イヤおもうに枝も空へ
ぬるゐ居　何ゐ空へまをぬり　代の本ゐ晴ハ居酒へまれて代りゐゐゐ時斗一来ゐ方ゐ入れ
来ゐこ極れ此酒の限り此来ゐ有也也　先ゝハ此拠はしゐまさう　此枝の無ゐとを
ゐふゐさそうゐ其門に酒のいゐぬ日ハ有まれい　中ゝいゐ日ハこさふぬ　失此間友来
ぬゐ謹穫しや　此間友て来ハぬ枝道理なれゐおゐ人の尾張の津島祭ゐ見物なれ
て私も其供て参くに仍てハテ留守に酒の入ゐ振ゐゐさうしぬ　ヤア津島祭と見物といく
中ゝ　何まいハ諸と面白ゐ、やと聞くゐ何とおくこそ　つと面白いて
ていさうゐ十ゐすゐ若し影し婦てゐさうに仍て咄て少をゐせうし存てよふ覚えて
参くゝ　是ハ面白かふ一ツ咄さうゐ　失ゐふハ一ツ咄ゐませうゐ　丈ゐ能ふ
先是ゐ伊勢ゐへ無て参れハ湊を辻て御をゐまる所ゐゐゆるゐ是ゐ一艘と面白
なてゐなる　謀来ハ珠らしゐ面ゐいるゐてなくし　逆すのゐた仕形を汲てやあふ
て此目無ゐせし　失ハ粋して抑ゐ　乃云想の人ますゐ　和ゐハたゐ能ふ
ゐ　さすゐとゐしゐ妨　身共ても添来也　中ゝ添ゐてゐなるさゐゐハ湊
御の友咄ぶ声ハと信ゐ此方私のちりしやちりしとやて中ゐるとゐまる所を汲し

ませう　是ハ一段と能ふ　是ハ衛が入ます　中島ハ何が能からうぞ　此棒が
よからうぞ　衛ハ此大きうなふ　此大きなハ口のれた太刀がござへば　中島へ見やと云ハ
添るでござる　殊に来て衛しやと云ハ添ふや　夫ならば早う囃させられい
心得た濱衛の友呼聲ハ　イヤア其形にしていさせられてハ衛が立ます　扇をかざれて
いらせらるゝが能ふ　弄で囃させられい　先てハ面白い時分にござる　面白時分にござるぞ
左右へ放しませう　扨夫なら少おさせられ　夫ならば少左右を下さる　又囃さ
せられ　心得た濱衛の友呼ぶ声ハ　ちりちりやちりちりとちりとんちり
濱衛の友呼声ハ　ちりちりやちりちりとなさせられ
降り面白さに舞ふて走り出て参る　是ハいかな面白い時分にござるが左右を
放しませう少ちやと見させられ衛が立ます　夫ならば左右を待や
急て囃させられい　濱衛の友呼聲ハ　ちりちりやちりちりとちりとんちり
アゝ是ハ其棒をとりてもておりてこそ　是ハ中島なぞへ下て参る　イヤく
此方も面白うござる外の衛を取ふ　夫ならハ衛を衛ませう　是ハ前に
かなふ　前是ハまた入ます　能衛てもよろこぶ　扨中島へ下さいやる
さあといふてまゐらせられい私の思ひよらぬ棒とりて山鉾を引く体を致ませう

是ハ面白うなふ　又是ハ山が入ます　何と山か　扨ハア山ハ何が能からうぞ
何ぞ山ます物が有かなふて見させられい　心得たヤイ何が山ますものハ
ござらぬシヤアア是こそ其棒をとりておりてござる　是が山ますふりをしてのおりて
ござる　是ハ山にハ此ちんさうなふ　ちんさうハ存じも寄らぬ事じやと云らるゝハ
添事でござる幸是よりも尾が付てござる是をとりて致て山鉾を引く体を致し
ませうないて囃させられい　心得てちやうさや思ひもよらぬか
し　てうさや思ふさし　思ひもよらぬ思ひもよらぬれ　ちやうさや
思ふさし　エイヤく　是て其棒をとりて引てござる　是ハ山鉾もとより
やむる所でござる　イヤく此衛も面白うござる　扨さあらハます　よう参る
いふてござる　やうござるハ有まいとも申ておきましハ此棒をとれて退かう
ハ依て此しゝ深いて面白うおりない　イヤ夫ハ内も開かぬ又はやるいて代りに出て
来りけるを　アゝ是く和尚斜ハ人に物を思ひます中に此木丸坊主今一つむる
咄いさといふて手間のとれぬ木ハ何がまいそこらよりまいて行く先　咄し
ならバ存じよりも衛したりとも棒ハやらせまいらずいてうなりて出て来やせ
イヤく今度咄し見なるハ代りなしまい何の棒をとりてまいものでもおりある

何と仰らるゝ今度罰し〱出来ることならは何の擶を代りをいたしに世に手に抱
てもおれと仰らるゝ程　申し其通しや　左ア〱然らは今一ツ罰しませふ　中〱擶の入
失の様な　鬼角なることは擶の事罰はおきいひてござる　是は面白
らぬ事しならしおかやる　夫なるは流鏑馬の様をとまれしませふ　今度は扇試
かゝり　前相手をいりまするお前にかゝり乞らまい　心得た
ご許あて馬場の事くしいふて一ヶ場先の人を拂いもてはや私の流馬ヶ来
るしし中てソ迯しこれ曲乗をいたしませう　お前もそれ一度とおもしろかりませふ
幸是成よひ杖作らうたる是ひらふ竹馬に彼いて曲のり致いたしませ
様に〱うひて一ヶ場先の人をはらりとのがれ　さア〱此ヶ場のけ〱
お馬がまいる〱　〱〱　ヤイ〱　やア　其
擶をちと〱きいて申ぬ　お札能し　おのれ　頼まるゝ人へお馬ヶ
来りし　何のこともち申しものとれく拵へ是と見え来て見成申まいそ
〱

真奪

是は此辺りに住居致す者でござる天下治り目出度御代でござれば此間の何なるき
お聊もとより立花の會は賑敷い事でござる大分参りも通りたる立花を何遊もと申入うと存る
先太郎冠者を呼出し申そうヤイ〱太郎冠者いるかやい　御前に　是其故なるは東山
へ立花そりに行う程に太刀を持て　畏てござる此太刀持ちてござる　何と持たか
朮さ　先なしは拝見て行しサアし〱　参りまする　東山へいさ
なしはよれ是の立花と云ることは有まいなう　仰のを通東山へ出るされ〱ならば旅
真の立れと申ることはござり升まい　是を取る〱なしは縁りし極りて居らし
失の様ならまりませふ　太郎冠者何まで来れ真を持て来る身共と何の世しか
是は何しらい拙者や　お前様は何の極れ真が何しらしござる程
ほしくいれて進し候へ　人の持ているまいかとしらて持しや　申し
は眉合の延るゝ奴でござるを何て私ゝれて進し候へ　夫はしらぬ者じや　イヤ〱見まれ
罷出たる者は此辺りと伝衣ねすまてござる山それ何なるへ此真致納果申て
仰付るゝ何て持て来りしと存る　イヤ誠に此是は致招て参り進上申し〱なしは定て悦
てつかはされ上此真は又あれ見える所真でござる　喃〱申　やアしさち

の事で御座る程何事でござる　聊爾れ申されてはござれぬ事は進上物で御座
るが但し賣物で出ござる歟　是は外へ進上致す事でござる　其故なしは是非及
まらぬか申しても別義でもござらぬけれ共の者は人は財宝を好て今日東山
殿をとりこめもし様が其事を見させまして因しし何とか下されは
とは私が申まする　イヤ最前も申通約束致て持参る事でござるに仍て進上
申は迷惑千万に存まする　失なれば額らる人へ目に掛ならござる依て少し此内貸て許れ
イヤ貸事もならぬ私が料簡にて申上させしめ　来る人ては申見させ申
てござるせひとも少しの間貸て許れ　イヤしし失はならぬ事が見させ申
身共も借りて何にとて依てとかくでも借られぬ　イヤとゞ有ても貸ぬ
ならぬ（暇を請て云て太刀を取る）嘆は嘆しや太刀と事しすり替て御座る先急て来ふと云て抜
嘆し嬉しやすまん御とこ云ても彼奴めて御座る先急て此由を報ら人へ申上ふ申報て
人ござりませうる太郎冠者の事ぢやて参りまして御座る　イヤ太郎冠者か来た
おそれて来てしごて参たは致す太郎冠者事じやて御座る　汝かと
て参りし　是見させ申して下さいまして御座る　是は見せ　畏
云事ござる　係りし是は見事なれ共是は東山へ入ると候と無極なよ何事は有まい

有　仰しるし通東山へ出生なされても手極めしよい事は行りますまする　扨
太刀は持てはぬるが何としよそ　かなゐ　申し　ハテ合点の行ぬ事しや今迄
持て居らるゝイヤイヤ今迄持て居りましたとは言事はと奪合ふ時分に太刀と事ときめ
らよりと致しは捨てござるが　主の者はむさしらしさ何の太刀は来ぬる重代で此主の百年や
武士の命より大事は太刀ではござらぬ内此事を見ても腹か立ゆへ引むしってしまいます　イヤ
申私の報角取て上申しとは物か其根引むしらうとしていたが有也て御座るか　捨ち
まづこゝへ出されると云諸侍が太刀をとこられて何と宿へ戻らるゝ物ぢや　誅是は
若き者ならば拾て御座るが何とおって仕つまりまさうぞ　何としての仕ふう
イヤまだ前から申と成たはし山一ツこの野らへの帰りしやと申て申しても何て戻ろとも此
通って御座るが拾ふならば私と出不合せて通らぬならば挑へて此太刀は扱いては
御役ませぬか何とはござらぬぞ　夫は汝と仕ふう汝は主の報をと覚えて居るか
随分能覚えて御座りまする時分で御座る是に其て御座れ　心得ました　イヤ申
何ましてござる　あまりの　申し　まふいてとらへう　イヤ私は只今承て抑りまする
云取らいて捕へさせ申せ　汝を連るは何の為じや此極め時の為ではおらぬか
らへ方　最前も申通我角私は只今参て居りますに依て大方取らいて捕へさせられ

いとやすい　失なふハ盗人を捕へるに依て汝ハ数々お掛をれ　畏て候　今
日ハ一段の仕合せ成て候、宿許てハ此者れ来とハ志らいで定て待兼ておりてござる
戻て此由を申さう　なふなふハ嬉しふて候ふ（汝も殊更しくよふてさしかす）お前免
何とおじやると云て見えまするか　何も見えハ致さぬ　ハアよい形じや　ヤイ己ハ家来の水破てはない
己めが破なれ　早うお掛をれ　心得ましたが己拙者が何をおっしゃる　早う
お掛をれ　ヤイ自界志つ居れと申てきた　ヤイ自界志つ居れ不ら早う縄をかけれ
し　縄をとの　おし　心得ましたが　己憎奴の数々お掛してきた　夫ハ人違
て有らうぞと放さしめ給へ　イヤヤ幸是へ絡掛の縄がござる今是がなふてくるまいて
ヤイ盗人を捕へて縄をなへと云ふる有物が　テモ途中てござるに何て外にござるまいぞ
早うお掛をれ　家の大事な能ふるサアサア夜ハ首をいましめ　ヤイ汝ハ丈
へ来ぬかからじや　失なふハ足へ足をいましめ　是ハいかにとすふ上うや掛よ
心得ましたヤツトナ　是ハいかに後らか掛れ　ほうじや　おし
かかれきたへサアくるしい　丈なふハ放すぞ　放さぬぞ　そりやそうおぢや
くるしい　何とするぞ　放せや　放いておいてござる　わ破ハとれへ放そ　わ
破ハいかさまへ来まする　何の横着者捕て呉れ居る送らぬか。

太刀奪

是ハ此辺りに住居致す者て御座る今日ハ北野の御手水の会て御座るに依て
参詣致うと存る先太郎冠者を呼出て申付う（如何に居るか）ヤイ太郎冠者の居るか
御前にや何て参詣をしともよふて候とおしやるぞ　是ハ一段と能御座りませふ　失
なふハ追付てもらしサア参れ　参り候よ　申々　こで是も能に仍
て定て賑かにおりちれ　誠にしかハ天気もよふ御座るに仍て嘸大勢参るて御座ふ
戻りにハ緩りと廉らて帰ろぞ　夫ハ能ふ存る（…）　是ハ此辺りに住居致て
御座る今日ハ北野の御手水の会て御座るに仍て参詣致うと存る先ゆりりし
参し毎も此辺りに若衆を連して参るが今日ハ外に用事もふさるに仍て来て一人
て参る天気もよふ御座る様に定て賑ふてござろふ（…）ヤイ太郎冠者　何事て
御座る　何のあたりにまたよ何と結構な太刀ておじやるが　誠に結構な太刀て御座る　来
もあれ程な事に構にハ支ではや　失なふハ私がえて上げましよ　さりなれハ人の物にて
太刀を何とうかうて持しや　イヤアノ方の眉合の隙に取てこざるに仍て我にとらしぬ
ハ存ぬなら私ハ穏便て御座るに仍て此御腰の物を貸て下されい　夫なふハ貸して見せ
うか是ハ世用にしたが能ふ　イヤしからぬ事ハおさへ追付取て目に見せ申ふ

早く夜て来れ　恐ろしく　ヱイ　ハア　偽もし早出行ずりうら色々売物

の有厨見物役あつたら来て　ハア是は何しや　後より太鼓持共五郎の左の肩へつきとふかうら口まねと来る　ハア是は何しや

子ども抱の相撲か　〳〵　兜上り小法師　〳〵　ピイ〳〵　〳〵

風車　〳〵　何と云ふても皆の衆しや

太鼓持共は門のきわめて首を引て見て来たと顔を見合せ　シテ大臣の方通りは名のり高く申けり　て　侭しや駒具唐物何やかや茶の湯道具出具　是はいかなる眉合の伸く奴らしと存て

せられは目の前の素性しや何て出居るイヤ道也とへて来る素もなをとへて来ふ

是はこれをき申つは人の持て居る太刀へ手をさしても定てお破て出居る正道也出て

来たし祝ふ云て又鬼々ものと見捨して打　シテ祝のふ口まね仏をして又太刀を取引ぞるヤイ家来者　何事しや　あまりに身共か持て居る

太刀へ手出さるかそ　此人込の中しや何て出さるるか出る物ても有るはさて　何しやさかり

出る物ても有れ　申し　己は定て大破ておりし一討にしてきう　アヽ主平命を助て呉れ

命を助け下され　申し命の助り下され　見まじいよ腰の物をさ出て居る支とおさ召

何しや腰の物をおさせ　申し　何と見うきぶても物しや共方をいおふぬし

己おさおさすは胴切にしてきう　アヽきつし　よふ出来た　つとうちへ返て居よ

心得た　サアとれ　イヤ己はかならい出し物をとる夜道の見あるとされ出ておさき

すはやし竹割にしてきう　アヽ是出てきさり　早うれ出れておさせ　せひに

及まぬサアとれ　ちゃうちへおさせしに　浮雲いる日出たる　先是は庇出の物しやヤイ聞か

何事しや　恥ヶ敷事なるか人は唯生た志を切て是かな己出斬ねるに

とれうかお行うそ　アヽ其平命を助て呉れ　仇割にしてきうか　何卒命を助て

呉れ　命を助け下され　申し　其方やまが出るは　出はすれ　足かあるは　出は

すれ　様子云て然し揃ふもし一段の厨ておさまるヤイ聞も　何事しや　今は北野への参りしや

に依て命を取てもする下向出来ぬくあがりは唯在日ておさまるそ　居よといふてもいる

事ていなれ　一来の物方とこられ　見るにそていなれ　つれくあかりは一討にしてもきふ

見はせぬ　こうる　見はせぬ　いりやうるいは己胴切にしてきう　見はせぬと云

こうれと云て　申しこうかでおていなれ　見ろか　こはせぬ

〳〵　〳〵是はいかれと眉合の延く奴らし有てこされは目の前のまつ申しく殺て

出居る失はともいけし私くく人の腰の物をとうれく何と被り家に出れるも道や

小仏て面出おうしうやおなて直にしと存るか私うく出方にさりまさせるの太鼓持共の太

刀をとられて戻り申しておさまる　イヤ太鼓冠者か太刀をとられて来ぬ事とて太鼓持共

何とれてもうし　夜前しうし　何とれてもうう　ちゃうちのをとこうちへれまうた

何しやちゃうちのをとこうちへれましとは　去は其事てはさる眉合の延く奴らしとねて出た

扨は目のさやの走り出しに來てござりますゆへ太刀へ手をかけ來ますると彼者の女が
其太刀をとりまして抜て胴切にせんとする所へまかり出てござりますは此腰の物をもちまし
て御座へ参り助かりまして御座ります者は大食者と存じ人拾いましてとかく私めにて
御座る　まづ其つましれと御云ごさるや何で無用といふ事にて其上に何の腰の物は
当代で此様人や二人ほど程ござる者しかと持ていまする皆　先は帰りか情なく出て御座る
何の腰の物は私がもちまして参るかいふか此太刀御所望は又と云入りは出ますれ共
まかり　其何れ腰の物私しかと持ちまする事つまじれ來ござりまする諸侍の何と丸腰て
帰らんと存じや是は先何としらぬものでござりまして　又有るは其事から出ござりまする
何かやは北様への参りしや仍て免まで下向に此節ほど居りまするは唯無事來てござれ
とかくほどしくに依て是に待てござりまする御掃へ参りまして此腰の物はさて右丸裸に候
まゐらせうず何とて御座りまする　是は一服と存ずる汝は其者の顔をとくと見ていまする
私しも身分の不手すら御座りし下向の時分て御座りまする故に依て是へ出ましてござり
まし　心得し

通りかかりは一服の茶を茶屋にて飲みし後、所用にて登りし時分は主人幕を回り
但し主より下へ戻りまして参りまする事にて日頃の覚えありて持ち込みしておりまする

三人雜文

是は私ありのままに仕舞まする者でござります来て細かにて御備前は数多御ざると
申すから先の私仕様と高札打まして私かけて三ケ所に仕形一服ども存ぜず候由ござりまする
何ゆへに候ぞ余りに死し去り舎てて候厨と候と申すは荒ましく仕舞になる
ござりまして金銀は申すに及ばず女芸の道を近寄りて申すに何とも承知致
さりまして申出しかねる所に山一ツ向ふの大有徳の方より来りまして何者には上る
まかり不仁者を他にして高札を打まし申しに候由もはやそれにつき雑文でござ
りますれどもそれは日頃の老人の日毎に申すに依て此遺ての居りまする
めて参りましたるゆへ先の御所望と参りしは深く御座りましても是は扶持をとやかう
まかりし候ゆへ段々に候様と申して付けまする者もござりまするまでいやまする
程々是高札の有様を見て心得まして肉をとりて仕舞ふ事に候　縁の節
高札の表に何でも参りし是非御座りまする　何とや高札の表に何でも来て申しまする
中し　扶持をとりてとしもせず此段御了承の　是は有難く候　祝言
かかる儀に先にしても世に　是は御前にて御座る　つとめ申し　心得まする
先に様々と居申し　候へば　存じ居る者は御存知の仕合の者でござりまする

ほどうり此若い者大きに御腹を立て致してゆきやれバ数ケ仕合か悪ふてつかへて
飛乃出て追ひ出して下さる何とうか様に申上ましたら山ミ方とうか候へに
有徳人か仰つて何者ハ恐れまい髪文字は杖指をしめしと高札を出され
たしか中来るも生れ付きに不仁て有ふかや ○たゞ片皆若人の不達者故に
中に何て先へとお○膝行めてしかし居る先ハちつとしかしして不便
世話に中ゆくお僕のそとてハ喧嘩に指事の果ハ盗をと致すより外ハ
弁しやうんて若い者てつかへるイヤイヤか程の高札の有人見付けしならち
膝行の体て乗物と気をつけしかる遊びの高札の表に付て早に片輪者て
泣居る　杖指をしてとしせし程に先立テ
何しや膝行しや　中に杖と居ると若いものしやか足不自由なり
耳の外不自由なり　私ハ膝行ていかる
居て居る　つとしなれ　杖ハ持てとしせし所し見れ
めんよの見若ていかるあすりは若き恐れ合て扉の角をと揉程に
しく縁にめ程被て下されハ数に揉ミてたゞて飛ばれハ中に及バず家
一跡追ひと出して仰る何て若い扉る文もなく跡の所て身とし迷惑

致す而に天道人ハ数をずとハ何中と抱て仰る山さ方どうか候へ有徳人か
下され何者ハ恐れまい髪文字は杖指をしめしと高札と出されて
中私も生れ付きに片輪て有ふかや ○たゞ片皆の若人が口不調法なれど
中に何て先へとお○唖めて来ふとゆかり唖の用意と致してゐる物で
唖と申者ハ無筆の物とゞ致してヨシヨシとさ中せハ無用ていかる中何
其後者しく来ふ京でよい方にしかもいまゝ何しも中ぶりかし
大欲にかつてあちらの抱とハさしとしれて仰るイヤイヤ來か程に見る札か
有さらバ許されう唖の体て乗物と気をつける　ヨシヨシ
イヤ是からめしにゆかりや志らぬイヤ舟ハ何者しや　唖所と申て書　何しや高札の表ハ
印付て来るハ嘘しや　ヨシヨシ　唖とさ申ハ藝の有物しや舟ハ何も
藝ハ無き物を所持る　何しや乃候得　ヨシヨシ　もふ陰を言る論をと
きるバ　ヨシヨシ　最早無言　茶と抱　何しや茶を挽　ヨシヨシ　そち
ハ茶挽か若しや抜指をしてとゝ世ふ　ハツ此ふ是ハいかれ
車暗か物と申しよう丈と唖の一喜と申て一代に一度物と申せハ其飛
のをハこゝ及ばず而近篤実被下しと中月も度々でいかるに何て抱ふと

なるヤイ　ヨシヽ〳〵　枝ねとしてもらい世ふ訳無れ　ヨシヽ
つと通ま　ヨシヽ　是、縁りと居よ　ヨシヽ　出ふますに
難支者とうへてつ是り路にこ役とサ仕ふとなるやイ　宝灰　ハア
何と退屈なり　左様とものでふね　毎朝は二三日の退屈に山一つ
あかさへ行程に、海は能雷るやこせい　畏てる　赤海の前に有はかる
物着しやそうな訳る程に　盗人の入らぬ様に番をさせ　左様も見らる
ますれ月祝居へますせ。ます着へしやさい。声てめ欠返答らなてや
ア宿さふ　料理そや　ハア　ヤイ　徐り　何と窮屈なり
左様ものでおりなふね　毎年夏は二三日の退屈に山一つなかるへ行列
海の前に有は酒着しやそうなに訳る程に盗人の入らぬ様に能番をせい
賜私立ますせ。ずは盗人大中さばかりもおかしやて返しませふ
料理そや　ハア　ヤイ　痛　ヨシヽ　咄退屈に有ふ　ヨシヽ
来は二三日の退屈に山三つ行かへ行又さらふ前に有は島目着しや是も
海に訳る程に盗人の入らぬ様に能番をせい　能くともふ何とするふ　盗人大いなる　徐て
仕舞しと言ふ　ヨシヽ〳〵　弟次の間にて有と何ぞ仕番て是れ

ヨシヽ　料理そや　ヨシヽ〳〵　座敷　料理さ人はそ筆揃ふてかるぬ
中頼ふ人へ料理は我方早ねまてはさふ　座敷に出る者は能者ると思ふ
角れは様の外窮屈なれ者しやさうは世目をと明て居しハア我らおけふ
申し成膝でも評申し冷ましならなれ声かするの　分てみて　旅見て　ある者は誰
しや出右に分て申し　かしの内に徐りしも　まなるのあつしてふし　膝行と之挽は能拗らとなてのされは
賜り砕る様成しさつしは世儒と伸いてみてア、痛やしとらしは立つ
しふてこ云中と云ひ入て也ヤイしくし　とふてなと中いふう行なとつぶし下居る　ヱイ和は料理なは膳を潰すまい拗を何
とりして是へ来てこそ　左は其分じや此間の不仕合の故にふつに
来とてもそ退しや備来る膝でも最前うらめし声かするの余所者
ては有るいあれへいて見てこし　一服と徒ふ　さらへ被見れ
公になし　左は料理所も来ふふ　宴ま所も来ず　さ人へしておで
いてせうし　先は佐ふは、ヤイしいふて毎人しておどすもテ肝をと　渋し　ヨシヽといふて毎人ことなる那に遂
ありは膳を潰すまい拗を何として是へ来てこそ　何として云て
毎人へ大に誹るの不仕合故に来ても　弟云退も其通りや偽味は料は何に
おて来てこそ　来は其遂に旅しや、何て合点が行ぬ　中し

合点のゆかぬ事也や　日頃心で能く違ふ目おなしおなしに依て引違て
出所にめて来るゝ　是ハ一座の前しや　備へ有すゝハ何ゝめて来るそ
此芸ハ形の形しや仍て合点かゆかまい　竟芸の形しやと仍て知らしぬ
事しや　日比和伝料達か不まだ出来しなりし申すに依て失をと事ゝ勝持ふ
めて来るゝ　伴にハ働かれてよい者しや　前々句ハ右手上ハ名でも
有ことに上最前のよふにめて来りするか何ゝめて来るゝそ　前ゝハ道具か
出ゝ仍て合点かゆかまい　何芸合点かゆかぬ　前ゝ和伝料達か不あ洞法れし
しなし申すゝ仍て事ゝ癖ゝめて来るゝ　是ハ物云ゝて継もの也しや
其通てありまする　丈ゝ付浮雲心ゝ有ての　丈ハ何としてう
是へ来るゝハ散らゝ人の作しゝハ癖と云ものハ芸の前布しやう汝ハ何
も芸ハ無くし云作ゝと仍て可と対し真似繪と云きゝ芸似業と現すの○さ
しうれハ第能く奴しやうて拔持を得し云作ゝ而て作りの様し
さふアッといふての　丈ハ浮雲の有ゝして何ともなく　流石有
徳人の分別ハ遠りし抱しや癖の一手ゝ云て一代の物をとこへハ云
取ハいふ及ばす不追る物すうて云て探りてくゝ一芸也

扨〻失をば付合せられ事しや　それからしまふハ付合か出来ぬしや
ことゝ申しれるも有し　伝当世ハ何も彼もハ芝ねゝ　是ハ
一語様々抱と誤りて　法様れ抱ハ何て有ふそ　されハ何て有ふ
かる物好と誤りて　実ゝ是ハ語様ゝ抱しや　其通りしや
備ゝ躰ゝハ何ゝ誤りて　身芸ハ当世よいものと誤りて何と
当流よ俗抱ハ何て有ふそ　されハ何て有ふそ　酒落を誤りに
いふ事是ハ当世よいものしや　其通しや　扨それハ何と誤り
是ハ一洞法れ抱と誤りて　洞法な物ハ何て有ふそ　何て有ふ
そ　香月荘と誤りて　洒ゝ是ハ一洞法れ抱しや　其通しや
扨又付方の相談かある　先ハいハ何れし事しや　先是かし勝ゆか
是へいて一通合して付其上ゝし此芸か鳥目とふう也しとし門出して
今一勝負抱してハならぬう　是ハ一座し継ふり　勝ゆ前の子を
ゆゝし見　公ゆゝ　諸ゝの道具か大事しやさりとハおこりめ
さゝ後へり　ふう也しふうしし　扨ゝ聞しれ無数しや
竟ゝ影しい無数しや　是ハとれ成さふそ　是ハ亭主の物好か

能らし　幸ひ小盃の肴にかけてある是に証拠に　丈か能らし
さらハ盃をとりやツて下さいう御ゐれ申しますか　深く是迄も
小ゐんハ　先ず汲て中程にて呑んでゐつつ　既宮に成いて其方か
中し　ミいちやしとある　てしと有ハさしハ御酒料も呑
し兜　お何し　亡き後ハ此丈か所に参りし　丈か能らふ哉覗しめ
心得く小謡　扨立つりて文おさにこそ何もて何そ肯をさし兜　何と此ぶし
られ　取りて舞ふて抱しや　其辞かおもしろいぞ　小謡しめ
先ずハ頼もしう　丈か能らし（あんの山と舞）ヤンヤし　さらハ楽か所へ
立つ小謡　扨亡き後ハ唾し平太か文おさに猫に一さし舞しあ　其ゐて
免ゆて其ゝし兜　八千頃の舌をしや吾小まいし兜　丈ばハ舞ふ
丈か能らし（ねぎし出て舞）ヤンヤし　今度ハ牙芸か事に立ち　丈か能
らし小ちひ　是まで上には酒盃にめでし　楽小よい酒盛中めでし　扨亡き後
ハこちら両人文おさし猫も鶴も何そ来でと花　牙芸て此に仕舞
いて其れ　両人とも小舞らさし猫小酒に中へ　[illegible]
丈かよひらし　御料[illegible]　心得[illegible]

ヤンヤし　さらハ浪花の所で御出なされ（さつきんをと流し）是ハ一段の酒盛
小舞申さし　其迄りしや　頼もしい事ハ能事ハ遠方にて
謡うし歴りて　浪小ゆりし歴りて
て有り（三千舞ふし二千枚立て）ゆりうし聞とも　てつゆる定免て發者る
儀て居るてつやまふ急ぐして踊ちるハ千合点の行ぬ酒盛乃
青か才か（ひとつ舞ふて）果ハいか事中物の間とあまし儀所か立派か
中程是ハ定免て水破て有ふヤイりし（ひとつ舞ふて三人共ちらし角の走へ行）已に其人もめぐす事でも
まゐぞ　そりや帰らせし（ひとつ舞ふて手をおて出る主兄行て）
ヤイおのれハ中程ていゐう　私ハ疵てゐやる　疵か物とも云物
アゝゆりさせしまし力（ひとつ舞ふて返せ）酒りつけ中ハ何としうちぬ
儀し是ハ者か肴しや（ひとつ舞ふて扨其外をとおて中程ハ疵）ヤイ已ハ膝行ていゐう
座敷てゐやる　何の中程しハ（ひとつ舞ふて返せ初の）掬もし　青か肴るてゐやる
三寳大切の道具をとりし是ハ先何し致し　今其人ハとれへ
らぬヤイ已ハ疵ていゐう　私ハ掬ゐやる　掬とハ　膝行てゐる
何の膝行已散く小折擲まちふ　免させしれ　青まいぞし

附子　一

是ハ此辺りに住居なす者て御座る　某所用有て山一ツあなたへ参る　夫ニ付両人の
者をと呼出し申付る事かこさつて太郎冠者を呼出し次郎冠者ても呼出す　来而有
両人共山一ツあなたへ参る間留守を申付る　畏りまする　毎も両人の内一人ハ
御供に参りまするに何とて今日ハ一人も御供に参りませぬ　イヤ思ふ子細有て両人共に
留守に置先太郎冠者　畏て御座る　イヤ是ハ附子と云物じや　よふ番をせよ
其段ならハ両人共に候に参りませぬ　先ハ大事な　ハテ何とてあるとすれハ外に御座
ハ入りますれハ　イヤ何せいハ要やては有つ附子といふて人の身に大毒な物で何の方か
ら吹風に当ても滅却する程の物ぢや　其段ならハ畏て御座る
イヤ此中上ヶ成事ぢや　太郎ハ何の方から吹てくる風に当てさへ滅却
する程の物に御座れハ何として手に取扱ひせしそ　是ハ尤しや何じやハ主と云物
て来る持扱ふ者ハ何た若衆に有ひ附子の側へよると滅却するに依て随分大切に
番をせよ　畏て御座る　最早某ハ行そ　定而早ふ帰りまするか　中々　緩りと
慰て御座れ　頼ふだ御方　頼ふだ人　イヤ頼ふだ人ハ
最早御出なされた　識御座れ　先下に御座れ　心易ふ

偖毎も両人の内一人は御供に行る合点何として連立れぬ事じや志らぬ　お前の通何
じやしてお供はいしぬ事じや志らぬ　去なから毎も壱人で御出なるおまへから別に両人して
留守致すのじや何て云合て出るそ　は志やる通云合て帰られた　そりや
何としてそ　附子芳はしらぬが吹て来るは　夫は浮雲な事じや　今度は間を隔て居よふ
夫の能い云方かうし御付なされ　そう道じやおもちへなりやれ　心得た　偖最前も
和尚料のおしやりしは何の事じや　ほ風に当てさへ滅却するものを何として持扱はせう
る事じや志らぬ　おまへやる通何共合点がゆかぬ事じや　夫なら来は何の字すか見て見うと云
うら何と見りそ　云れ者は何の方から吹風に当てさへ滅却するものを何として見るる
の朱机じや　イヤ是夫は上仕掛の朔　何とすれ　あの其風を請ぬ様に此方から
行て扇て来う　是は一段と能ふ　夫なら和尚料あふひて見さしめ　心得た
あふげ／＼　行ふぞ／＼／＼／＼　今紐をとき精を出してあふひで
見さしめ　心得た　あふげ／＼　何ふぞ／＼　そりやとひたは　何とした
まれやと取た此度は蓋をとれて来ふ文あふひて見さしめ　心得た　扨こや蓋をとるぞ
蓋を取た程に随分精を出てあふひでお見やれ　心得た　深の通の手
何とえたぞ　先落付た　落着たは　生きた物あるがよつて出ぬが生物ではない

有れと云た　がゐる事すのも志まじぬ　／尺取て参り　夫の能い　手向ふひで見さしめ
心得た　深の通　今こそ精隨を精を出て何ふひでお見やれ　心得た　そりや見たは
何と見た　黒うどんみりとしてむまさふな物じや　何じややらうまさふな物じや
中に　手も尺て来ふ捻て扨こあふいで見さしめ　心得た　深の通　誠黒うどんみりと
してうまさふな物じや　扨夫は何の附子をと云ふて尺うと云ふ何と有うそ　是は命
来何の為に世ぬ来てさへ滅却する物を何として食ふ為の朱机　イヤ夫は何の附子
料せうと思して頻に喰度うなついて喰うて来ふ　イヤ是はやる事はならぬ　そなたは登
為する事はならぬ　為せと云は　ならぬと云は　名残の袖を振切て附子の側へ寄た
人が死るは　是はいかにと何としてこりや　むまふて死るは　何やらうまふて死る
中に　其は何や　砂糖じや　何じや砂糖じや　扨　夫なら来も喰さ
しめ　心得てかふて見さしめ　誠是は砂糖じや扨もうまい事じや　イヤ是じや
和尚料が大事に成るも喰さしめ　イヤ其方は最前喰た程に身共に喰さしめ
イヤ此某も喰はねばならぬこちへおこさしめ　イヤこちへおこさしめ　夫なら
ともに喰う　是は何事じや　其通じや　扨も人の両人の者に
留守を申付て附子じや物の毒と云ふて　滅却するなどと云ふた　憎さも憎し

只く泣し　手此放さうとしてハ在ル　順ニ落ル掛ルし　其通しや　ヤ寂早皆ゝ　数ニ有ル人
誹皆ゝ　叔ゝ和尚ハよんで比ゝ中有ル事の　よんでをとしていハ　数ニ有ルてハ在ル
の帰らせられ　有しハ此寺へ上りまする　イヤし是ハされしやあれハ掛物を引裂しめ　何の御掛物を引
来社真直ニ中上ルそ　女房人ハ見初めも喰初めも世話ニてハ在ル
裂ハ中訳ハ立ち　中こや有ル泣き顔しや　失あらしハ引裂し　早う引裂し兇
さつし申して有り　ハア和尚ハよんでの中有ル　よんでをとしとく　最
前の附子ハ見初めも喰初めも来させしめるも扨も数多く人の清太切の何のお掛物を引
裂といふ事を知らる数多く人の帰らせられし有しハ此由を真直ニ中上ルそ　女房人ハ
是も寺へ引裂と云ふハ仍て引裂ハ来社其ニ申上る　イヤし是まされ似たやの何の
墓天目をも打ちしめ　イヤし其ハ寂早いやしや　是有らハ今度ハ任して割り
割り　クワラリチン　徽墓ハ無し　誹ゝ徽墓ハ無ゝ緒中訳ハ何とするそ　数ニ有ル人の
帰らせられしハ何事を見て泣しめ　泣ハ中有ル立ち　中し漸帰らせしる時
分しや是へ寄てお中やれし　心得ゝ　緩りと用をも弁して待さら両人の者ゝ迎て待て
居ってゝ居るふ急て迎へ中イし両人の者共今戻しハ　扨申や帰らせられハ急て
泣し兇　心得ゝ　両人共泣　是ハいかな某ゝ戻しを悦びハを尽して何の泣ける　次郎冠者

早う中上させしめ　う様ゝやうて見させし兇　是ハ心掛られしもし扨ゝ早う出へ　さうした
其本ニ見在る清太切御留守にて中在るニ仍て眠てハ似たれはうとまされハ頭り眠う
ましとハ依て次郎冠者と相撲をとられてまされハ次郎冠者ハ力う強し中に私をとれ
打付うとねしまする事に仍て負てハ有る事なれとね清掛物へ手をさしれてはされハ何のこと
徽墓引さけましてゝ在る　是ハいられ来太切の掛物を引裂といふとうなる
手ゝとれまするへしさう者よ墓天目の上へ太そしてゝ在まし　何のことく徽墓ゝ打割まし
ゝめ清在る　扨し憎いやつしや秘蔵の墓天目をとうらりお何のまて下さ
是ハ本てハいたれかり　帰らせられさなしハ迚もいけてハ有ら申られまし何て附
子をも喰うて死うとみふされ次郎冠者　中し　附子まて喰あつゝれとれ
壹口喰へとも死なまし世次　貳口喰へとも中ゝ死なす　参口四口　五口　十
口余り喰ふ有れとも死なましぬ来乃目出しとも　いつふとし
から　何のかしらさ何の横着者とまし　極人心と経めて目出られる屋当
為し　極める法かゝ得為し

舟船

是ハ此辺りに住居致す者てござる 此間ハ久しう何方へも出ませねハ心か屈して悪うござ
るに依て今日ハ思ひ立て遊山に出うと存る 先太郎冠者を呼出し談合致さう
やいやい太郎冠者居るかやい ハア 居りまする 御前に居ります 汝を喚出すハ別の事てもない 遊山に出うと思ふか何と
有うそ 御意なされますハ中上うと存る處 是ハ一段とようこさりませう 去なから此辺りハ
大方見物しましたに依て珍しい所へお供しやりませ 夫ハ何方か能からうそ 仰の通大かた
此辺りハ御見物なされましたに依て珍しい所へ御供致しましたらハ御慰て御座らうと存る 夫ハ能う
よう御座りませう 夫ハ何方か能からう 扨西の宮ハ何と御座らう 去らハ西の宮
といふ所ハ景のよい所か 随分景のよい所て御座る 夫ならハ追付て行う 夫
ならハ参らう サア/\来い 畏りました 去なから其所の道をハ御存知か 夫
所ハ浦山をうけてされハ浦て細道を見せられうとしも山て猪をとめられた思ひ候
てござる 夫ハ一段の事じや イヤ何としていふ内に是ハ川へ出た 何といふ河や 太郎冠者 此川
をハ御存なさりませぬか イヤ何共存せぬ 是ハ神崎の渡しとて、かゝる大河てござる
神崎の渡しと云ハ此川の事か 中々 是ハの猶ても有か但舟て渡るか 舟も
此辺りに舟が御座るなんて参りませう 早う呼んて来い 心得ました 舟も此辺りに

舟か有か何として見へぬそ イヤ渡し守か居らぬか 呼うて見よ ホヲイ 舟をやいホヲ
イ 舟やい ヤイ太郎冠者 汝ハ何と云て呼ぞ 太郎冠者ハ存せぬ程に ホヲイ 舟やい/\
ヤイ太郎冠者 舟と云てよへといふ 私の前てハ ふねさうか 何茂の聞をよう存て其指にハ
来なと仰られるか 和歌に何とよんだと思ふ 古歌にも舟を呼ぬと申たに 船
といふ所も有まい 汝ハ 己か推参な 古歌迄を云か 夫何といふそ 私にも證拠が有て申
何しろ とふなりの渡守の上野の秋風か吹て何と 吹ていますると 先ハ是て聞てか
有う 下りゃ御もとして 古歌をも出させられ御聞ハ致ませまる 其の方ハ舟とよふか 古歌
か有る 何しハ諷をうたふ 心得た ほのほのと明石の浦の朝霧に島かくれ行舟をしそ思ふ
是ハ何と舟を云ていふ 失ハ舟てを呼ふ 此の分として古歌を直次を出
来まいか 私の方ハまだ御座る 何しハよい 舟きほふ堀江の川の水きはに来ゐつゝなくは都鳥
ハ時鳥かも何と言ていつきぬか 夫も定て舟て御座らぬ 太郎冠者 然らハとして古歌
を出させ 其ハ太郎まする 其方もやれ 有 あれハ作りか 此度ハ早う
詠ぬハ若しれぬ 早う御免遊し 朱共諷を出 心得た 舟ハ
侍ハ太郎冠者 汝ハ束て居る これは此しやうに 候 ケ数ひ 暗 此の歌をも作り何と可詠べし 歌一ツも申ませう 夫ハ家来の
歌てござる 最前のハ人麻呂の歌 今のハ猿丸大夫の早歌といふて 三のハ一ツなき大儀者か

遠うても近うても歌ハ一ツでござる　夫迄も存じてはござれど着場
ところの名所ハ何と申ますか　夫ハ禄名よ　されバ名と云申せバ名とハ申
ませねど上私の方にハまうしござる　あゝいかに　おめでたく船人も誰とかしこと云大
島の浦なれバ小声の関なる何とゆかしてハござらぬか　先丈よまする　心得ました
是ハ此のまへ太郎冠者と申す古歌穿鑿を致いて居りましたが何とかいたさうかや
よく仕し根が出ござるヤイ太郎冠者　何事で御座る　其方ハ身とも諷ひ諷ふたる歌
方にハ有まいか　ござりますれども方よりござりましたも私の身に似合ひ諷ひぶりが出ませぬ為
御座りまする　山田矢橋の渡し船の夜ぶかきかよふ人あるとも毎月のさはり日ハ大方何か
いやまでもさうしましたが何らんぬ　ある主殿　何と　此方人もかゝる礼に出ませう　何事も
ならぬ事まするがあまり　ハア　エイ　ハア

山田矢橋を諷ひ出すと役ハ退てイヤ一段の事でござろう出さるゝ所で諷ひとござる

舎弟

罷出たる者ハ洛外に住居致す者で御座る　某兄をも一人持
てござるが此間近へ参れバ私の有る者とハ申さいで舎弟
と申まする　舎弟と申事ハ中々能事とハ悪い事を当て存じ
ませぬ　扨ハ此度試さセて下さる方か御座るに仍て今日も
あちへ参り舎弟の様子を問ふて参らうと存ずる　いや
来るハ近所の衆を只今参るも私がても一寸頼ぬ私の兄をも呼て
御座る　十分ニ知て居る先々何と致さう　先参りくハ
私の有るをも申されて此舎弟と申まする事ハ
よいことか悪い事か尋ねてみませう　いや一枝に
教て下されい　舎弟と云事ハ此の所に六ケ敷事やら仍て某も云
てハ覚ぬこと御書に物が有様に見えぬ　教て下さるゝ丈に法
伺ませ　心得ました　是ハいかな事　兄ハ愚痴な者も何れも有
相手の年あの年に成る迄舎弟の様子を知らぬと申て教へ参らさ
あの様な者に寛と教へていふてつかうに依て能ござるか教て

兄と喧嘩をと致さるゝ人とはみる喃く、なかゝから　出て居りまする
依書に物がたりには腹りよいかでもなん役に此びた立し先
生いふ愁悪りよふぞうな事に致て言れ　是を云て此せるなれは
兄と喧嘩をとすりてみるゝ　喧嘩をとすりてはつまる姓兄派た
教て言れ　夫なれは云て此さふ先会弟と云は腹ゐへいて人
乃物をと棄内なしかうへ補にへて居るのと会弟を申次
すれは盗人の半てつまるから　先は其根見て弟を盗人にすなりやる
故に悦んでてつまる兄の心として弟を盗人にすると云は道理
腹の立夏てつまる　先に夫なれ申しまする云ふて之に板と言る
てはなれり　腹は立ませぬ私はそれは訳が来りまする　心えてや
なりやるか　さらいし　よふなりましたり　ア喃に腹立やし
先急て来り此旨をなどゝ申さするまれは道理にて兄の心からと
弟が盗人にすらいては道ぬ悦んで来てつまる　イヤ来りて居る兄や
喃に兄やへ問たなりゐから居さうしまゐ　イヤ会弟がらそれと
て夢が致ん会弟なりませぬらめ　何や会弟なりませぬゆる中

今迄は会弟の根子をと知らなんでは中依て　惣出なとてしゝ
向後会弟しまさなゝ申しては右のぶは道理でいふなれそ　そうらいは
ふ機嫌の悪敷の流そ喧嘩てもしそて来るか　相定は喧嘩の
あることのか　生なれは酒きても酔らし　根本も世ぬ酒に酔ふ
物か　夫なれは注そ酔て友ことかくるのて有ゆしなら此申せし
先てそ親をと親父と云母親をと友脇の兄をと捨兄弟と会弟と
いふは皆世上てゆ言の葉てなさやる　先なら此申せし父親をと親父と
なりし昆布しなりし亦母親をとなふらしとめし又あん家とは
となりまし其は泥に会弟しためはなりなれそ　左て会弟と云
いふ毎申しやし兄てゝ居るそ　右云弟へいて問ふれは会弟
と云は腹ゐへいて人の物をと棄内なりゆえ神よふつへて居
ふなは会弟すると云しなかやれゝそれへて給へ再は会弟しられ
其は泥に会弟しやりゝはなりなそ　左の毛一はへ人此の悪敷申とく云
いり弟か会弟まて事か訳るのぶ
砧をとかく兄は声は訳らふいゝ之　ひくなりは恥とをかとぶの
夫なれは云ふ生先月の地蔵講に

辻の三所の改ていなかつたら　歩の合せ方の　先方より出れば次の間に
甚天目の方ふれは丈とも聞し合蒲しくていなから　何れは三所
に夢ふくのしや　何三所に夢ふさ　中々　夢ふささとの方友
之されて御て井欄に通ふとの　己は悦る奴の兄の配は流の碇
しや皆己の配ていなひの　申されし　あるは之　丈先度
隣の三所より班れ出ても牽て来ても白は頭など墨て深なるびの
市へ指ていて愛ていふ方のあきは天目合蒲の班合方といふ
ことのしや　ヤアラ己は悦る者の云せし通は方是もちらなのじが
出られやれは中々かふして三所いらよい　兄しやといふて頁いる
妻ていないイヤアしとまいれての備ふて
やくし兄をと出へ下りして生来のちふ有るまいと申入のそ
とらへて其作ほ見未高高し

雑

是より此所より小作者役者にて出なる明の未明に太夫蔵人と出来り此なる所へ使
をさし来る先呼出て中に付けり（若のやく呼出し）如此呼出仍の別役にてもなれ仍鈞未明に出て
此なる之使中の役に一番鶏の鳴ふらなしいあるせ　畏てござる　此度忘れぬ様せん　心得
ました　エイ　ハア是はいかれての明朝未明に使をさらし小依て一番鶏の鳴ふらなれは
起せと仰られし何卒度忘れぬやうに致うと存るハアよう度と是はいかなる接拶に目
かかけし何と致うイヤねしせらるござりかし　何事しや　夜の明ましてござる　是
はいかなる壱番鶏の鳴ふらなしいおきせとて付ふ小日らかなふらわ世ぬおし起さぬか
されは其事でござる私も鶏の鳴ふりしと存て耳を欹て聞て居ましたが世間
小唄るはござろうらの鳴り鶏はござりませぬ　去れ共はむさとした啼と云も祇と云も
同し事しや此方　古歌にも啼とてござれ詠ふとはござらぬ　推参なのを云ふ古歌
なとて何云おる古今の所しはよう兄　扨ますた何の啼は何国の奥州陸奥の小田守
山に金花咲何と鳴ていござりしぬ　丈は定て祇りて有う　去なれとも古歌を
をさせしるはなりますまいよ　来方は調とといふ古今の所を　所しは誠とされ方
此方に言はる所は白のほかりとは其雑も祇りえ危何と詠ふていなれか　イヤヤ何と

其短かし短ひ言ふみな相てござりますぞ　イヤ長歌短歌とて短ひ言もある物ぢや　いや短哥
ぢやとやても其短かし短ひ歌はござりませぬ物を上私の名は歌よみと申て古歌をござりまする　何ぢや
よんだ　わたくしの帰八社別まで参りまして荒り物ぢや　里の咄しも何と唱ては出ませぬ
夫も訳てござりまする　それは格別として古歌をあそばしまして夏は冬になりますのぢや　又おちこちも
何しは聞せられぬ物　わたくし叔初のをばく　扱いて古にはいて御座りまする　おもしろき　それども
夫れとも歌一ツとやら夫は最前の事でござりまする　夜は奴は歌は一ツでも早歌といふて作者は遠く
左様なれ　いや左様では云ふは同じ事でござりまする其上私の方にはまだござりまする　あれはよみ　わたくし
毎夜も何事はまづよみかけて、みなけれどもまづ詠て歌をとも申つる其上詩にも寂し函関
鎖未開田文車馬蓁出来朱門三千客不養食雖雞鳴得放廻出心は昔唐土の函谷関と申関の
ゆひしやら無関のあひにて鶏の啼声を聞きて関を出しける孟嘗君と申す人討もあらされさく
隣国へ落て行時夜半比彼関にむかり鶏の声に似せさせ給ひれは関守誠の鶏と心得関の戸を開く
故に雞をも隣国へ落て行是も雞の空啼である法にやから詠ふもよみ給ふまれ　先丈は落て
叫ばれました　是はさ太郎冠者とはやしゆる古歌を覚て居らし給ひ何と言ふ　イヤ彼根
さこざりまする太郎冠者　何事でござりまする　さうあれは訳をと訳り候を有る故に方には取る　おもしろき
わさしは私の方ども皆よみ給ふは詠とやなし　わたくしうちぢ迦りし　イヤ作り詠を訳

さてしおく彼の根を取る　子町の何ぞうちらるは　嘲主殿　何事じや　ちと
はう本に鶏からくふて其上の声が啼ぬ故　何でもなんな事ござりましたか　はア
エイ　はア

瘻　痔

是は無何かりに住居いたし者でござりまする今晩戯客がござりまするに仍て太郎冠者を呼出し和
泉の堺へ肴を取に遣さふとおもふ　ねる呼出して呼出す　別な事でもなく今晩戯客が
何る程に汝は太儀ながら今から泉和の堺へいて肴を求てこい　畏てはござりまするが私は
肉居て働きませぬに仍て次郎冠者を仰付られませい　イヤ次郎冠者は別用あってとらへるほどに
是非汝ゆけ　こなたの仰ならば畏てござる　何とも申されぬ程早う戻れ　心得ました
エイ　はア是はいかな事　参りたれ無い事を仰付られた　何と致そ　イヤ仮病を起いて参らぬや
まれと存る　アゝ痛　イヤ太郎冠者が声でいかやうにもとや　何事じやとおろぬや
やい汝は何事を云ぞ　私は只今の事でござる和泉の堺へ参らうと存てござれば持病の痔が
発て一足も引まませぬ　アゝ痛　扨し失は苦しい事じやまで又痔は胞の咒らうて
とらせう痔出れ　や何事でござる　痔の咒に顔へ灸を付たは其
何ぢやといふ何て失ならぬ　私の痔はいかな灸を付させられても出る事ではござらぬ

丈八ハ何と子細でも有る歟　成程子細がござる云て聞せませふ子細とは　心得た
先私の親ハ子共数多持まして御ざりますが兄ニハ此地を譲りまして御ざれ共私ハ一の宮じや
とあつて親代々の屋敷を譲りまして御ざる　扨ハ夫ハ迷惑れ物を譲られました先丈八まて
畏て御ざる　是ハされバ太郎冠者が和泉式部へ参りまして思ふて仮病を起した何と咳
イヤ咳払ふ御ざりますか　何と云て今晩伯父は御振舞下さる　則供ハ太郎冠者を連て来いと
被仰下さると云が此太郎冠者ハ持病の疝が起て一足も引れぬと云何で次郎冠者を連て参ると
云て出ませエイ　申し今ハ何事を仰られます　云ハずと事じや今晩伯父志やの方へ御振舞
に連下されまして有て則供ハ汝を連ていかしやれと仰られた共体でハ御ざりませんと思ふて
冠者共連て行ふと云てまで　私が参りますればと　何とて許て行ぬ物じや
私の疝ハやさしい疝で御ざりまして宜しう御ざりますれバ合点致します　夫ハ申し
ハ疝痛じや早うせんと申しておりましたが　畏て御座るヤイ疝よ
きけ今晩伯父志様へ参らせても私の所ハお茶も出ぬ所のとあつて余り遣ひも御馳走が有る
まいと思はれる疝痛エイホイ　今度ハ何じや　疝の返事でお座る　扨ても
ござらいで見えまするじや扨よん所　一段よふお申しやる　太郎冠者ハ立て見よ　意外なる
いとしやと思ふて下されまする　さうも見えますじやサアくにて何とせん所　一段と能
お申しやる　太郎冠者ハ前へとをれ　畏て御座る　扨ハ夫ハ脇へ寄れ　此方を見て通しやれ
夫ハ扨も心得た　畏て八米る　何とまひか　一段とよふ御ざる　何とて爰へ来りた
行まいと程　いかにも此旨を申し遣ハされまする　太郎冠者ハ先和泉式部へいて斎を
お頼んで来い　和泉の塚へと仰られハ赤持病がおきりますヲヽ痛しく
行ても叶ひ申事でござりませぬ　ハア　エイ　ハア

鞍馬参

是ハ此辺りに住居致す者でござる今日ハ初寅でござるに依て鞍馬へ参詣致うと存る
先太郎冠者を呼出し申付う（若のやく）料をして念を入申すハ汝を呼出す事別成事でもない
りふハ初寅じや依てくらまへ参うと思ふが何と有うぞ　御意なくハ申上うと存る所に
一段と能うござります御供致しませう　先あれハ何ぞ道具を持て出い　畏て御座るヤイく扨
こくへ参れ　畏て御座るヤイヤイ　参れ此世に依て何ぞ道具を出して仰付るヤイヤイ
何事じや　此方へとハ何の事じや申ます　夫ハ者ハ此内に居て道具を
持ぬ物が成た　除れ丈式ハ後先持て来ると云へ　畏て御ざるヤイく　扨くさる人の
御内に居て此道具を持ちねば居りまする除れ丈式ハ後先成て来ると被仰る

シヤアイヤかしこらハ法が切までつきり途ハゆるさやとれへ申さるゝきつとも狭施
ハ人のかゝけて出ら行なしてハ尻ぬと申ま厄い　其ハ極れりもかう来る前てハ若衆
かれら何者の前でこと振かるをと云ながらしへ　畏てござる　不断物参りと女衆
いるしぬ物しや女房人供に連る　先からふのさう済もふ　サアしこ成し　参り
ますかしく　此のアゝれ物参へ長道具ハなしぬ物なまた太刀振をもちてハ取り
のよゝものぞやなア　御ゝ通れなら刀振をと持ますしハ取り此位ねてござる　然た
も追手造て持せしぞ　夫ならよふ御ざんす　イヤ何角云内是ハ早御前しや女中是へ
ござつて拝め　畏てござる　ヤイ太郎冠者なかか中ぬか　拝ますと絶ござる　拝ます
とはれといふて主より先へ出て拝むと云ゝ有物じや　神仏の前ではとも下人の
隔はなしと申　いかに神仏の前じやといふて主と下人の隔なふて成ものかへ欺ハ此
たハ通夜改まる程に女ハ先へ参て拝つの支度をせい　拝川の番改申しますから
夜が明たならばいかふのか　畏てござる　エイ　ハア是ハいかなることか内でもつかふかる女
らひて外て近拝つの支度をせいと仰しにこれハ余念もなふ床でいかさ起いて
申すぶかし　何事じや　宿坊へハよふしもござぬか　思ふ子細有て御供へハよぬ
女ハ拝川の番改をせい　畏てござる是ハいかいな事毎も宿坊へよりもござるれハお

茶の湯のと云て茶迄も出地き然ニ来まへ然た参しとなる中に宿坊へハ私斗然た
参りませぬから　夜れ者ハ女をとやまいハ能たも行毎も布付へ申けハお茶は出湯の有て
馳走なるに迷惑さたよふまはと云事しやいかれ斗未と云ゝた拝つの支度せい
アゝ悦まも憎し今一度起さふやりし　アゝ痛しい何事じや　定て茶ら中外まは
女ならさしいふも推量した如りくさの信て居し先へ参て休め　畏てござる
夜が明るならハおこせ　心得ましたし　エイ　ハア噛く嬉しや是迄聞か迄しやさ
らハ休ましふいかし　荒有難や多聞天よりの御福改を下されたハ我も明たら起
さふやしし　何事じや　夜か明てござる　誠に夜が明る此程時社早う起しハ
去なて依夜参宿坊へよりさんなと振て直に下向せし　先が継しつさりゝ済まふ
サアしゝ来れし　参り済ました　諸毎といふ云ながら我参ハ大篭てあるなア
御しらせ通毎とかかなりし大篭てゆりはしらせ　何の大篭の内て我ゞ
耳此程女の声へてつらつしと云ハ何てかるそ　何の大篭の内でぶかるに依て私に
似る声も出て有済もふあまいハ私てはござりませぬ　夜れ者ハ女改もし来る女
さへとし余人の夢と聞得ふ物なる真実定而聞くつくかすしと云へ　其れハ去実少
来しれまゝしら　来し　夫なしハ何と隠し済まふ我参多門天より

徳福と申てござる　夫は目出度事じや　其拍子は　其仔細は夜前夜半斗
りの頃御殿の内が震動致てござれば八十ばかりの老僧の香の衣を着られ水晶
の珠数をつまぐり鳩の杖にすがり此年月鞍馬へ参られたる福を与へぬ今祓福を
与へんと有て福有宝貝を下されてござる
畏てござる　是はいかれて参ました　徳福を太所宿老に下されてござる　何と致
イヤ面白い事か有ふ　いふてさらば一人へわたそうと存るやいかに　太所宿老　何事でござる
来て某も徳福を下されうかは　夫は諸共に目出度事でござる　子細は如何に
急々守来に下されうか　あまり徳福あれとも如何と連て何て如何に渡す路次て請取と
御作ないで福を是へ渡せ　夫は迷惑でござる　何の迷惑　さりながら徳福は
那ら此徳福私の福は私の有りと別しておしるふ　テモ多門天の御作で来る
難す来は致者足洗の所は内へ渡さらでは　それは真実請取をしらう　あん
ても無事　然らば其分　心得た　是はいかな事いの梶に云てに何て渡さるゝ
致者は遅も渡されぬ　数に勝て渡さうずと存るやうに　何事じや　まうぶ多門天
の作じやされたる所聞きられてござる　イヤ何たる事ぬ　福を渡さば福渡しと云ふ
来てして渡をさうすれば渡しうと御作てござる　去て福渡しと云来は

如何目出度事じや　別して致る事も存ぬ私の鞍馬の大悲多門天の徳福を主殿に
参らせたらんやと参りませうさらば去者ら此多門ありやたまうさと作りまして
来てござる　其分に致そう　大方覚えて請取て根に渡を
心得ました　鞍馬の大悲多門天の徳福を主殿へ参らせうやら参らせう　去て是は
如何成事じや　おかもしいかさくて〳〵作らう　去れは迷ひと云事か
来て今度は詞の下らぬ請取を　心得て早く渡せ　然らば鞍馬
大悲多門で此福を主殿へ参らせうや参らせう　せまりて
アヽ若衆でござる失てこそ徳福は渡りまさぬ此度は左右致して静に請取て
心得て是へ渡せ　畏てござる　シテ右初の通に云と謡節にかゝりて右末の通云て左右へ寄る　夫ては請取ぬ此度は
拍子にかゝつて請取を　拍子にかゝりて請取を　大悲多門で此
方々致こそその参らせうや参らせう　多門やたまうさ　参
ら致さ　せま〳〵　〳〵　ハアと作り然
此よりの目出度此来る徳福は　あまりし相者の事じや　徳福は去
致る此よ之と納りまして　然れる日影にいつも居ます　ハア
エイ　ハア

蟹山伏

大峯かけて葛城や

行者の跡を山伏の人　是ハ出羽の羽黒山より出たる
駈出の山伏です此度大峯葛城を仕舞只今本国へ罷下る者　強力清水とは
本国へ下りますか間供をせよ　畏てござる　サア〳〵来い　来ます
〳〵　扨此程の難行苦行ハ何と殊勝にあるまいかなふ　御意の通影を受けて
ござる　供来る行法を世上でハ何といふか　大形上東北世上で生不動じや
とやござる　定てさうで有う　汝も随分情を出いてやがて先達にならう程に
何が扨随分情を出まする　イヤ何かしいふ間に大きな沢へ出たが是ハ何と云
沢じや　されハ何と云澤で御座るか覚ませぬ　是ハ定て蟹か澤でいかう
誠にかやう澤で御座る　ハア何とやら雲が覆て沢が暗ふ成　誠に山ふかうなる
やうにござる　此程の不覚ハ無用心いて早ふ通へ　先か暗ふ成ふ
サア〳〵来い　来りまする　扨何の水ハ此やうに俄に暗うなるとハ思
はなんだが合点のいかぬ事でいたれ　と振てうさう　幕の内からヤイ〳〵何れ
へ何やら異形な者が出たハ　誠に何やら異形なものが出ました　外道ハ無う
イヤ外道ハ有るまいぬ　先まて〳〵　勝ての元の異形な物が逢て口詞を掛たん

たと有てハ後難も口惜い詞を掛て見う　去なから側へハ無用でいる　心得
あやい〳〵先へ出たハ何者じや　二眼天に有一甲地に着大足二足小足八足右行左
行して枝ふかの精と有るまい　何といふぞ二眼天に有一甲地に足手大
足二足小足八足左右へ左行〳〵　是ハ蟹の精で有う　誠に蟹の精でござる
ヤイ其ハ蟹の精が何として出たぞ　汝が行法を慢ずるによつて妨んが為
是迄顕れ出て有るぞよ　ヤイ〳〵かやうの者としては来の行法を妨ると何と
憎ひ事ではないか　扨〳〵憎い事て有る何の世の中にハ此金剛杖で甲を打
砕いて悦の泣き慟かけにはしまいぞ　イヤ〳〵夫ハ無用になされ　イヤ〳〵なる
ものハ只ぞ憎い奴めの今此杖で甲を打砕て呉う　ぐよふて杖にかゝつた何に龍も蟹の耳を挟む　夫みよ
ア痛〳〵　何とした〳〵　志てかやうに蟹の耳を挟まれました　何卒此行力
先生へ耳を挟まれたと云によつて苦しい事じや　何卒此行力
て祈り放いて下されい　夫ならハ祈と云ふ行力で一いのり祈て祈り放いて遣ふ
何卒いのりを放て下されい　心得た先山伏といつぱ山に起臥するによつて
山伏なり何と殊勝な　頭襟といつぱ布切を黒く染めて殊の外痛うてならぬ
八　今祈りまいらせてやらふ兜巾といつぱ一尺ばかりの布切を黒に染めたむ

さしむさびよろこびいつきよ依ての兜巾なり数珠といへるいらたか珠数
ていふてもむさらしめたる草の實をとりて未来の佛数と名付く此珠数
押し一祈りいのるならハなとか寄特のなかりけるボロヲンボロヲンと　アヽヤ
し　何事じや　さあるいのりもつて我をたのみ申さう
祈りやいのる祈祷ほどなく揉む　ありや　よもぎてもつて我は此度ハ祷り
殺いてやろう　何事いのりナウ何方で下されい　ナウ何事いや聊悪心深
き解なりとも明王のさ羂くかけて今ぞいのり祈るなるハ聊とも其の
糕たかの悠哉ボロヲンボロヲンと橋の下なる菖蒲ぞ誰が植えし菖蒲なるぞとも
おりもしボロヲンボロヲンと　いのるならばなどかハ返りけるぞ　シテの耳をとらへさむとシヤキリ　アヽ痛と　東切此うぬハアヽ痛　両人寛例て入
しじ今のうちに祈と申じへ抱くなを　何方じへまいりおる　何の解と
らくくるくくれたる盾の海氏なし

腰祈

三ツ目峯入延出なる　此若衆出り咄

大峯かけて葛城やし是より御山へ　是ハ出羽の羽黒山より出
たる延出の山伏にて候　我大峯葛城を仕廻ひ今本国へ罷下る也去来
我に祖父をもち候が年まかりよつて候間是非を尋ね参り依てよ仏前て法
弁る従い沢山とて羽黒へ成下よりそう先ず弁り〆のよ弁ふ深き仰の方へ
ありしいハ中世夫夜ふさ山伏の功いふ役の行者の跡を継さし御霊なぞといふ
見て出明菩山野を住家として行ふ有り難き殺生を致しいう中も
おろかな事でござる其者稀には宝殊を架ける趣とも日の出の前へ祈り届ける
山外の行力でござる　イヤ何角申内に故郷へ出てきた　この外出分けて
さらハ手にて故郷へ上り若も定かへ参て上つらハ我の外出張らせて家紀
相も従謀りつらさう依久しいのうてつれる事依て祖父の所々を庭と見
ぬる者も鉄ゆうり〆やせも見ハ先我案内を乞ふてみう　先以案内を乞
表に物申と有案内と云ひそしてつかさう　是ハ何の殿でおりせよ
ヤアノ御の殿で御座るか　申し〆ば極もし久しかり宥ふて何と
見ぬ時ハ山外にも世に出でつみる　依然ハ左前寝ぬる　左様てに成る

寔ゝ名残して逢さに付て身共も只急きて何と祖父はよい様に世ふ
ふと申もおりなれり　随分御息災にいつも常にて御家の御繁昌もろうを
御ふれてつまうな　さらは板東ゟ来て参り候中よて呉れ　畏
てつまう先つ今ハ表の出立へ参てうせ申ふ哉　扨ゝ御時宜中し
祖父は板御郷の為はあおらぬやつらう　御りやうふハよい天気しやと云ふ
イヤ左様てハつまりぬ　伯の殿乃はおらぬてつ居る　ヤアノ伯殿の
見せてこ　申し　ヤレし嬉しやどれ〱ふ居るそ　およふ逢せてくまさん
まあ妻へ逢てせいて出居る兄うあまへいませぬ　畏てうまる　御ゝヤレし祖父
ハ年う寄て腰か痛い　およふ床机をと呉れ　畏てうまる　伯床机て出居る
ヤイし太郎し　ハア　御の殿ハとうふ居るそ　あれ〱ハつまう
まあう　中ゝ是ゝおりまする　六あまさう伯の為う　左様て出居る
併もし名残う只ね用ゝおさ給うハ出郷中おめ世の中ハア　ハア板私か
駈出ゆハ御道の供と致しまする其上毅何芳の目にはうつるひて
久々出来ゝ法にさ　てうまるう祖父はよも御息災て目出度い事ょう
其祖父ハ御の殿ょハ見捨らぬ安ハ世話は大元ゝ人数多しくへさせてくう

しとふよ依て此祖父も年ハ寄つゝ去たれとも若ゝしく読施の者にありた
おりし出ふてすい　右役立ハ御ていつされ共今も中参りの法に隙
かうかまうふて伯御法と致してつ居る　夫ハ其様成事も有ゝ乞食り
名残も来なんとも腰の立て逢まいとハ思ふそれとも逢こふれハ姥
てく腰く急くしやれ太郎よ　近年伯てまる　あの伯の為ハ是の二つ
好もやれ依て来すハなきらハとうせらし思ふて其の出帰て候て逢ま
かく名残も来ぬうちに大きな事つてつまへともあれ〱おりしはかうそ
とふせうし呉れ　畏てうまる　ヤイ太郎寝若むさうしたる此作らくし
左様てまる　ヤイしまをよ　ハア　伯の殿ハ旅う帰しや家へ還
枘さ有しおふとふせん　御畏らし　是ハうれ手皆来う初お此因
かれる此作ら　左様てつまる　扨祖父はハ随分御息災さうふな
かうその外お機嫌うかゝ為せしぬハ定免て伯窮居まする　誹の外は
窮屈しやし作らまふまする　何と来う何方て御て連ん上う何
よ有ふそ　是ハ一段しや　ふうれり手せう其参り中上ゝて見吾世ふ
失なうハ何ふて呉れ　御畏し中し　祖父は様御の殿乃

御ふたりハ其方が目をかけらるれバ腰をも折迄仕て上まらしうて御ふ迄
ます　何しや其祖父が御代ハのり迄いて居ます　申し　なふ
物狂やし　何と此度ハ爰にある身が祖父の御名が皆ふ御わかり狭ぬと
いふて来る物しやかしも若衆うしなし之　さりながら此角
始ふてハ来てハ御座る耳御てハのり迄れて笑ハせられて参ふい
能しつやらふし　夫ならハ元も角も能いやうにしてハまいらせし
畏て御座る申し祈り迄仕て居なし始ふまいらせます　ハア　扨も
いのり迄仕て上て　若の如く祈り候ハ祈るに随ひ腰をのばして御前へ　ヤイし太郎し
し若狭風来しやいの気乃蔭で今参して日天子代淡も申しや
申こ誠なれ心憂ひて御座る　夫ハ近来満足すか　ヤイし太郎し
ハア　扨是ハ何迄此母にして居る支しやしいふて御覧見ん
畏てござる申し　ちとあの通りにして若ひ者どもが見やると
始ふていまいらせふ　此一生の間其通りやしいふて見ん　御慶が
毎日一生乃間手を迄りやし始ふまいらせますか　何しや一生世話や
申し　喰物狂ひし　何し一生世話りして居ふか　物しやまで

元の如くにしてくれさせい　申し　元の様にして迄せし始ふ迄
ますか　是ハいかな事　夫ならハ赤ハのり迄仕て上り（世話ハ好ぬハのかハ）不思
心得さし　祖父御の腰なりとも関王の前に植て今一祈り祷る形
いなとうち若狭のなりくさしホロヨシし　橋此下の菖蒲ハ誰がうへたさ菖蒲そ
扨まし元なつふきしホロヨシし　若まし元かふ迄ホロヨシし（祈なハ菖蒲ア庸　祈りうまらす）
しし　ヤイし太郎し　あの人の気ハ世事若うし祖父をとるふりに来さ
りやふ元の如くにしてくれさせし　捨るやし　申し　祖の外に抜
立てうたする何卒元の様よ祷り迄仕て上させいふ　いや　能う来る
か御給仕御仰てしや亦今度ハ祈らふ祷り記さふ仏とめハよ仏因なふ
うらみうふ狗池りとて之　畏てござる　此日もあちらふくる
召（シャナリ）しやうすか　祖父御の腰なりとも世いろはの文字を今一祷り祈る
なふハいかなとう若特の若うの狂言にホロヨシし　保呂波仁保遍止ホロヨシし
千利奴留遠和加ホロヨシし　つりやとこ之ホロヨシし
狗池りとて之といふ附のある所演りより捷ほ校誌
腰くとあてうるとし　シヤキリりとあし上立ちなし

神鳴

薬種もわかぬ中に医師〳〵きらゝやたらとなりん　是ハ洛中に住居成医師で
有る唯今ハ都ニハ典薬頭の何のと申て之より医師の数多ふさるに仍て我ホ如き
の野夫医師にハ許も脉を見する者もふなふぬに仍てかり渡世が送り難ふ所で
いて迷惑致するでござる失ぶ身用かたしハ東にハ医師がすくなひと申程にそこより
東へ下り一稼ぎ致て見うとぞ存る先あへ下りし参り様に住馴し花の都をむり捨
て他国へ参るとり申ハ本意ニハ存ねた渡世為れハ是非もなふてござる前仕合を
直れて参らハ都へ上てこそ存るイヤ参る程に是ハ漸々としてかく広い野へ出てござる何とした事
野じや志るかね是ハいかなる俄に空がかき曇て神鳴が鳴る呵も此所ハ長居ハ無用急て
里近くへ参らふとねる　ヒッカリ〳〵クワラリ〳〵　アヽ南無〳〵
ラリ〳〵ドウ、痛や〳〵扨ハ心面ふう呵渡気まゝしハ不斗雲間を踏はづして
此所へ落て志たゝか腰の骨を打たいイヤ是に何者やら居るやい〳〵ヤイそこな奴
ハア己ハ何者じや　私ハ医師でござる　石が物をと云其方　イヤ医師と申て人の
病をも直ス者でござる　何じや医師と云て人間の病いをを直す者じやと云か
扨てござる　扨其方ハ雷じやいやい　ハア　一月ふハ心面ふう呵渡り気ニふとまろ踏

まだ何かて此上ハ薬て療の胃腑あるかゞ打さゞ此跡の医師なしハ飛んだ標を療治
してござる　畏てハござりましても私も是迄色々の療治をも致しましたが雷の
御療治致バ絶て致さぬ事がつきぬ是ハ御免なされ　己ハ憎い奴の人間の雷のと
いふ引違ふ事ハ夫れ已に言つ事じやと云て療治をさすハ引裂て退う　アゝまだ暫て
気のれ御療治をば致しませふ　何しや療治をせうといふか　左様でござる　夫ならバ
命を助けてもらふ程早う直いて呉ろ　畏てござる併先お脈を伺ひませふ　脈
といふは其手てござる人間は左右の手で脈を見まするが雷神様ハ頭脈と申て頭で
見ます　夫は先程知ていろてハ無死　ハア　サアサアハ、ぬ仕して脈を見て呉ろ
畏てござる　是ハ何とあるか　ハア夫まじ御してござる　何と有そ　ハ、お雷様ハ御持
病ハ御中風が有ると云ふ物じやが　扨も咄いゝ上達じや身共ハ持病に中風が有ぞやい
お極てござりまするが　是ハ薬で上ぬ事が途中で薬がござりませぬ故てお針を致
ませふ　鍼といふ　是てござる　夫は何とするぞ　是ハと痛む所へ打込てござる
夫れ者は夫の何と打込む物じや　扨しきす事ハ此比怯れて夫仁人間でござる
まかな物を御雷神の三さえずしはぬと申す所か物ではござりません　何しや人間が云る
其　よ能人間へ云る物にハ飛んだ云らぬと云ふ事ハ有りは云う程　アゝ云

て呉ろ　畏てござる先横にならしやれ　心得た　此両りでござるか　ここ其ハ当る
しや　しかて打まする程に動きやれますれ　動きはてハ悪い　ハッシ　ア痛　ヤ
其様に動きやれてハなりませぬ気を静めしてござれ　心得た　ハッシ　ア痛
早う致て呉ろ　只今元ずる　早う致て呉ろ　サア致ましてござる先起立て
きやれ　心得た　何としてござるぞ　今何とやら快う成た様なれがまだちと
痛む程に今度ハこちらへ打て呉ろ　畏てござるが左様の程に動きやれてハ打ちまぬ
となる程に必動きませぬやれますれ　心得た　此し痛まぬ程に打て呉ろ　心得た　横にならせ
せられ　心得た　此何してござるか　ここ其様にて　ハッシ　ア痛　其様に
動きやれては鍼が打てぬ　抜てござるか　気を致してござれ　心得た　ハッシ
ア痛　早う抜て呉ろ　心得た　サア抜ましてござる　何とあるか　扨も
先ずハ起立て見られ　何とゆるぞ　扨も此ハ能上手じや脈の外快う成た迄の事
立て見られ　心得た　扨ても快うなつて呉ろ　心得ました　ヤットナ　何とござるぞ　一段と快う成た
さらバ天上せう　先待せられ　待とハ　其ハ其事でござる人間の病を療治致升
ると分限致して夫々礼をとりますが、療とも何ぞ礼をとらせて其上で天上なされ
ム是ハむつかしや左云ふハふし雲間を踏迦て此方へ落たに何て何も持合せぬぞ

汝か宿を云ておけ重て落てとらせう　夫は何たる迷惑な事を仰られ重てこされ
夫ならは此扱をとらう　其は何の役に立ぬ物でござる外の物をと云れ　其ならば此太鼓
をとらう　夫もいらぬ物でござる程に何ぞ外の物を下されい　今も云通り何もないと云に
依て何も持合せぬなれ共人の為には能き物をやらう汝は何も欲は無か　左様候ならば
願が御座る　夫を云て見よ　雨風は其儘に自由なれ共　中にも所が自由に成
事じや　扨して世の中の旱損水損のと申て深ひと聞も其ままに何て旱損水損の
なき様に守てくれ　是はむつかしい事じや扨其はいかぬ程に　いかにと申てもござらぬか
其は聞えもしてくれ　是は限の無事じやが三年世の間守てとらせう　三年と
申ては夢の間て御座る万々年も守てくれ　弟子と云ても難しい事じやが左程に
万間を以て八百年守る旱損水損の無様に守てとらせうぞ　是は有難ふ存る
其上汝を典薬頭になしてとらせうぞ　夫は有難ふ御座る　約束は違はぬ程に
此諷りて天上せう程に汝も夫へ来てきけ　畏て御座る　隆々照々　去程に
其間旱損も損も有間しや此所は薬師の化現や中風は有難や医師を典
薬の頭と云捨て又も師は上り急ぎ明神は上りける　光りかかやく
茶きりりん

十七

清水

是は此あたりに住居致す者でござる天下治り目出度御代でござれば
此間諸方におゐて茶の湯が流行て何れも寄合て茶を催す先私も明日は
茶の湯を仕まうと存る先冠者を呼出し談合致さう　冠者の
居るか　御前に　念なう早かつた　汝を呼出す別の事でもない　明日は茶の湯を
ならうと思ふが其方の水が無いと云て手前の水で茶を点てて見たが　先私の所で汲まするは
柳の水か醒ヶ井か野中の清水と申せども野中の清水が一段
と申ます　尤もさう聞く　汝は大儀ながら今から清水へ行て
水を汲んで来い　畏ては御座れども此頃は清水へ参れば元無用
と申まする是は此所で迷惑な事を申　左様に無用と申すは
どういう訳じや　承り及ぶに先夫なまめて　参る事も
鬼が秘密の桶を以て水を汲み是をと申が　其水を汲で来
夫が恐しい申しまする　夫は不思議な事を申　汝は左様な事を
申て来ぬと云ふ　夫も行かぬと申すると云が　それは此今迄も参る事は一度も無い
有る方から宿へ来ても嫌ふ迷惑な方へ行て汲まうと申す　イヤ此方へ

こゝに松が出居る桶どに立載鳴渡しやりし助けてやらいアゝ何やらし
イヤ太郎冠者が来て何やら云ひもしや何とした事かねやイ
何としてこそ　其平房を助けてやらい　是ハあの身が冠者へやる何と
したぞ　ヤ形ふしぎてつかふ　十ゝ何としてこそ　論から
誰も述ふていまり申せぬか　イヤ誰もおふていまぬか先何とした
相ゝ浮雲いめにあれむ清水へ来て何と逃したる上の者
みとめてとうきに退けてやらういなかのはじりしかしまけた
に何て何かやってしかれ振り返り見てやられいやいあれ鬼がお
おして用ひる　備へあいだ何かで有し故何としてこそ　者
下ツてゝ人乃来ぬ所へ来ていさして武者道立て方へ天窓から一口にいて喰
ふうとアゝしたがましこゝ依て今喰らうてしなて漸ゝ是迄逃
て来りましての居る　相ゝ先へ浮雲の亨へや相桶へ何としたぞ
桶の　十ゝ　角り鬼が出てこう述して依て振り
鬼のつぶしねぬ亦へ何ふして去往て跡ともみ何て逃て来り
こゝら迄て見つやしし者が致てやらうさを定て桶い嘘割ことのて

御なとに叱去て杉といい太郎冠者ととゝへ拾かせられしし中投げてやらう
言ル所いもうしゝあまいい来る秘蔵の桶て御ぞへや武人へ
見る事桶てい有らう　夫い御りお情ならめと仰しから　ゝあの桶い求
させられゝなしいつかとしかいう無用の太郎冠者いまゝ武人いつゝうか見
まいゝ其つまゝ此事とゞにまいい桶のほつらい渡して先てゝまし　イヤヤ
鬼の出ろかいらいて定ててらまう　さましるのげ　此方へ南てあうて何の此方へ前そ
こぶのけちに　是いの目清水へ参りても鬼い出てい何とさぶ
イヤ言てい風流の為から中のに何もてし是を持たせ　相く
合点が行ぬるて清水へ鬼の出ぞろゝてかの何も会
点乃ゆき見るて近寄る先急て来れ定て何まへ来るし如ふい根さ
知まいぬと申来いつうりもいイヤ来て被に流る中や桶いとの鳴りに分る
しや知ふぬ　いて喰らふしゝ　アゝ鬼でいあゝしゝ　一番御返上て口キ忘るくか
イテ喰いうりしアゝしてヤイりしたそ何出ふ御　已い将乃出円の七ッ下て
人乃来ぬ所へ来さい定めて武道立て方へ天窓から一口ニイテ喰ふうふ
アゝし　其平房を助てやらん　一命を助りし何か　中ゝ助ろ

申しけるは　舎の眺めるといふは餓鬼の衆生と申す　何が事の申せし
其一已は人をひの悪業　イヤ人をは餓鬼の　生々の事で居る
此人々をば云ふ餓鬼さんと夜立てはせぬゆへ地蔵と云ふきをば何の衆
容がな何の夏故居るとつさうぬとナ　イヤつかひせまする　飢人の餓
鬼と居る向後斯やと思ふさうふさうぬまで　沫ふせませし
已つきなからず飢ては天窓の一ト臼とイテ喰ひしアリと　沫ふせませし
来らる　ちうとさうか　あの云餓鬼は酒を一つのなり　ヤイ　分
夏分には冷しまて　冬分には焔と云ふ事を以てあまりいやしと
云程喜ぶに飲み給ひ　喜せませし　飲させぬ故ては天窓の
一ト臼とイテ喰ひしアリし　アヽ飲せませぬ　何しや呑さし
申し　夫分には餓鬼の衆生に沫ふるに飢て居ると眺て申す餓鬼の
鬼方さと居るの有居て　なりふは天窓の一ト臼とイテ喰ひしアリし
チト居る筆ではさうぬ　居るの　居ては夜さぬては何とや見たかりし
已天窓の一ト臼とイテ喰ひしアリし　アヽ居るかなてはつうぬ　居るし
よくつぐ申　居るは夜さぬ──
入道面にて食ひ度いとぬきうし

まんまとおとし十月へで行き参らぬ様々して行てしなりし行かの數多く
人は何となされし参らぬ　扨々是ほどいめ中へ逃ふてから出る先
急いて居場にふしなり　エイ數ふる人　鬼はとれへ行て　こ所
の途でふらつかぬ故て地獄中をよりて　へふぬ途の
為いての外方多の悪業しるとするの何とも不逃れはなかりぬの　イヤさ居る　まつなる
こその其諸侍の者中に逃てしいふて其の変するとしいふて申その有様
十返させ申し迄て是と云ふの身へなて居るし　まだ居るは先ノ袖を帰す　されは云
乃悪しいる途の　中々直は實ぞての事　なうりに人と居るばかり
あつりに誰もなへいませね　夫なるは　いふて曲さうふ清水へいく
まは鬼のなりてな　失へ居せぬは鬼の事のは定しやしなてつうる
夫方有清水の鬼は鬼のゑとあとまいしらくそちは餓鬼中鬼は是
いう　さあ早に何かるまたは従け鬼と申しもとこ鬼し申さるなりしやまある
有る程や鬼の餓鬼道では何かぬのでもみし　アーヤレ
失はつもし古しへはありてさうか　何しや古しへの事しや　申し　其分
いよい极鬼の清水へいくと餓鬼は何しつて　ちつ下りて人の来ぬ所へ

未だ何も定めて武道立てするならば天窓から一口にイテ喰はうぞよ
申候へと　さう云ふなら　申し　先程は申さぬ事とは申さぬ
最早申まい　是はいかな事清水の鬼の姿して寿命が延ると云と何て
さらば何たる合点の参らぬ事でござる　さていて一度参らうと存ましたれ
共清水へは鬼が住むといふほどに　何たる申ませぬから　何とも
いふまいとおもふたれ共其の今一度参て見せう　去ながら人の来
ぬ所へ来る程に天窓から一口にイテ喰はうといふて申候ぞ　イヤ
さていかな事罷出る者の中にさやうの事をいふ者が有るとは申せ共
申し　去ながら人の来ぬ所へ来るは定て武道立てする者で天窓
から一口にイテ喰はうといふて申候に　さらばさうなら　申し
若い者共でも勘当はいたしたるといふて参ふ　さていてなぜに
の事でござる　さらば此の事とは　一度の者が此の武道の紀
するしやうに申てござる　何の合点まいらぬと思ひ　口合点でござる
さ此の事といふ者　是はいかな事赤がなとは申まい　扨も
合点の行ぬ事でござる清水の鬼の姿して寿命が延ると云

と何て此の度は何ともあれ参るといへば根子の食事ぬらし申さば
此寿命延ぶるまいイヤ参ろう程に清水へ参しや　イテ喰はうぞ
ござるが去ながら此の上は寿命延べていたすれば　イテ喰はう
ぞ　何のイテ喰はうあの様な者とはいへゆくそとおどしてござる
せうかと思ふ　免させられ

首引

是ハ鎮西の由縁の者てござる某訴訟の事有て久しく西国へ下つてハござらぬか此度訴訟も
おもひの侭に叶て安堵に依て帰国致さうと存る先罷下り妻子にも逢はやと存る古郷を
離しといふ共中々に物てござる都ても此様な事ハ毛頭いて罷下らうと存て
居程に急て参らうイヤ何かと申内に是ハ淋しい所へ出た是ハ何といふ所じや
是らぬかいや急く程に是ハ定て播磨の印南野てござらう誠に空がかき曇り山も吹荒るゝか
此様な所にも居ハ覚有急いて罷通らうと存る　イテ喰はふ
ア〻免してくだされ　真平免してくだされ　ヤイ〳〵ヤイ扣へい
某が事　ヤア　おのれハ播磨印南野の鬼ハ播磨の印南野といふて七ツ下つて人の通ら
ぬ所へ来るハ定て武辺立て有らう天窓から一口にイテ喰はうやい　ア〻武辺
立てハござらぬ某命を助て下され　某実命を助りたいか　中々命を助り
度うござる　一つ頼う事が有る　畏てござる　イヤ外の事てハない一人姫が着る事
夫ニ身娘を一人持てござるが未だ喰初をさせぬ程に喰初に娘に喰せうと存る
やい汝ハ　ハア　何共ハ娘を一人持て居るが未だ喰初をさせぬに依ておのれを
喰初にさせうと思ふが娘に喰まれうか身共に喰れうか　ハア迚も助らぬ命か

ら御娘子に喰はませぬ、何しや娘に喰はせし　中に一臣とよふ云ニ御
なしハ今娘を喰ふ事は迚も一寸も動くか　動く事ていつぬ
イヤ喃に娘おらぬ居さします　爺様わしが喰をして何して呉る
に付こと喰せん八別の事てもかり飲は、若い者の三人来さに依てそれら
は喰初に喰さんと思ふて別为て無き程にあまへいて喰し先　心得ました
ハヤヤここ様　何じや　又まいな若い者しもに依て命を助てやらせ
喰さいしてしたるを云ふ若い者しやに依て喰初に喰す其様れ事を云すた
まふいて喰し先　夫なら八済ませふわしは役に立ちを喰さふ事ぬ
様に爺様のみ砕て御下され、相し扨ら八私の娘程と、なれ此話れを伝え夫てハ
喰初のやんかなれこれからか嚙み付て喰しめ　其儀ならハ嚙付て通はせふ
扇をおし先アア痛しし　ヤイ娘何としたり　わしは心も爲らぬ撤
きゆした　相し悦ぶ前のヤイ子供共ハア　太切な娘を為せて撤した
う　さま迄ハ子を事て呼る余り上気致いてあらふ迄つく仍て扇を取を致いて
御前の若夫か為に抱て呼る　何しや扇を取をした　中に夫はいよう恐を
して子てはせふイヤ喃に娘今扇を取をし夫の中に抱て有うと云ハ六ケ敷事ハ

おれ程よ御迷へいて喰し先　夫がハ済ませふ又例へ嘆罪やく　是と何と
こう　未でう叱りほしく　相し悦奴しやヤイおまえ来てか叱りおつて　私も
此間喰ふ気の迷つて何うすまふきら出る者の夫だち喜れ抱て呼ふ
何やまい小紀をした　中にヤイし娘相し抱ハむまれた抱や今まる何と未れかき
ゑししことを云す日此紀抑につかと云事か有抱かサアし早ふ出て喰しめ　心得ました
もやし　何じや　鬼神に横道なしと云事が呼る私も只喰るハ余り残念なとてつよう
子依て何そ捕負を致て肩にかけハ喰迄ませふ又捕にハ命を助てやれ　是ハおもしや
相撲負にハ術をまぬり　腕押を致ませふ　何しや捕かし　中に　イ五尺能せハ行迄
や一番来し　イ五了作に喰迄すかなハお作こと致ませふ　此娘子を喰迄ますに依て此
娘子と捕負を致ませふ　是ハおもしや其通娘に云ふ夫ぞて　心得しる　ヤイし娘只
喰てはおもしやに仍て何そ捕負をして捕負に仍て喰迄と云程に捕負にハ何をとまる
ると聞迄ハ腕押をせふと云に仍ていかれく出て腕押をとし先　わしゆて呼る
是ハいれうに娘か事か有物かまふ出て腕押をとす先　夫ならハ致ませふ　腕押をして扨く押合る　アア痛
しし　ヤイし娘何としたりし　わしも此わしれも何のむくつ為なれまて
捕付まして呼る　相し悦ひやつしやヤイし　ヤイ子供共八ア　なかに娘の称ふるか

身とハかのれハむくつけおいらまで去り付ける　一ツ此とも能思ても刀へさそて此命にけれ得ぬ
て帰る依て出張し首まいぬてと帰らぬ　今夜は河を出家　儒押と致せふ　一匹
と供ふヤイ姫今夜は儒押をせふと云ば又ひれへ出て儒押をはし免　心得ましたる奴僕
気アヽ痛〳〵　ヤイ姫何としたぞ〳〵　ヤヽ爺様わしいかい此相わかれ股へ灸の思
しい毛のまへる足を入て云てがに掛付まして御へ　様に悩ぬ奴ぬやヤイ此のまいぬ悩奴の
かさふに悩ふ掛付ける　完て申迄命にけて帰にとて依ても猶ふ申も帰ぬ
中さ世てまいれ　今夜は安張う首らぬ祖とれ　畏て帰る　相人何とも出せね　今夜は首引を
致さふ　是は一夜と能ふ噛く姫くて夜は首引をと其由云ハ又かれへおま出れ　悩まし大
夢くせ掘を致る首が出ぬ　畏て帰る　サア姫是をそこらけれ　悩まし　サア先け　男
是は此はれ手に組ひけるよ引と云るる有物ら迷も姫一人ては爺な眷属衆を呼出し姫の加勢と
さすか掛に誓まで　畏て帰る　眷属共　ホイ〳〵　衆と呼出すあまお前ても
なれ姫のそこ引をするる姫の方の弱いれ衆に加勢をせれ　畏て帰る　サア皆是へ丸付
悩ましふ　掛是らは来る音頭をとれ〳〵掛は拍子をつて先け　〳〵先け　エイサラ　エイサ
ラ〳〵　姫の方の弱そ引や〳〵鬼共　エイサラ〳〵　引や〳〵鬼共皆々と出せ鬼共　エイサラ〳〵
眷属幾ニ引て廻りシテ掘へ身をかくる時肩そてたく一ノ松の元へ引て来てエイ〳〵ヤラと云ふて眷朝首の掘をもつして走るす姫を外鬼も皆あふのけてあるぶ　イテ喰ふ〳〵　トいふて追込ミ

十九

鬼継子

先いつて我わる人に徒居ならん若ていやるか一ツあれて〳〵親里へと指て行
身人夜も使りも影ふぬ程にいふ人も夜に来ふて出むかする先を待さしく
来ふ運に親里の程遠うかやるふ仍て隣のなんの家のうかしさい再に人夜に
来るか申もなくいても元おに思ひかする姫の爺様も猶かせふるも申もおん
喰やふイヤ何角中内是いもう毎の暖へ出向しこふ広野は播磨の印南野
しいふて情くし人遠ひもなしいいひとつきの急いで里近くへ来ふと思
ひまなる所もいも人の連て来りあふいの水をつてか当開つちゃの来る京
隣にあるを指ては傍り迷うぬ何するを依てしてはさ人へ来る日でかする
イテ喰ふ〳〵　アヽ悲しや去年来ふ方を眺てしるれ（一両返し）上りて　イテ喰ふ〳〵
アヽ〳〵　去年来方とお眺めやて下さんれ　ヤイ〳〵掛出せ出れ　ハア
おのまへは悩ひおりの夜は播磨の印南野しいふて七ツ下つては男さへ通
らぬ所を女の身として来る人へ通るといふは定めて武道立ていらさるか世ぬ去年
窓かに一匹にお喰りやれ〳〵　アヽ何へて武道立てい方へ天
命とお眺めやて下さんれ　ムヽ其迄は何申も懐へ入まてゐる夫は何や

是ハわが子を拾ひてかへらん　何じややはりわが子じや　なつかし
失なふハ先妻の子なりとて仕合ふ　わが子ハいよ〳〵大般若と呼びて
下されかし　何と呼びても同じ　中〳〵　さりとは夫にまみえし　嬉しさよ
偽りし美しい女の名あの下がり眉目のよい女をとらふて仕合ハ惜しいが
しや夫は今来ハしまい定かに妻の法度にぬれ衣して何事ありとて来
る妻あはぬとはまだやかまし　されバ夫のあるなり　申しかねまする
奴の逢ひハ惜しからぬの夫なれバ神楽をと参り居る物の形の逢ひ偽りをと云なる
何に偽りを申し拘かへりなんと能に思ひしても見すてられぬハ夫のある女
ちて神楽をし乱れ雅いとお指して法度なる　是ハ能芸の詞にて按摩と云ふ実に年の
助かりし形　尋しく助かり給ひかりさうな　名を助かりなくハ神鬼の
いふ名残なくし　何ゆゑも祭りて申せし　身にハ恥かしいと誰がなれとも
いまいましき定まる妻がなひに何とて此を連れていて来る妻とする私がなふ
きつ絵への者の物狂ひにいふ若の助かり給ひてといふて夫婦なら
何とて形の妻の名なれバ抱きて今宵から是と申して申せぬ　あの逢ふ
惜しけれ汝の元つましといふて妻となりけれハ中〳〵その子の名に頼むなく

ア妻に有りもせん是非命と呼びて下されん　何じや妻になふ
申し　ヨイよれ合点じや先なふハ逢ひ逢ひて蓬莱の嶋へ連ていて思ふ
何ぞ法斗さへせふぞ　夫と嫁とふたりつれる位蓬莱の嶋じや住ふ命なふハ
此様てハいふて法度なるに何をして夜を経りて参りなふさうなる其間許子の
守りとして下されんか　何かさて安ひ事じや是へなにをそ見るまいて
名を当ふ　先づしまししおせし　嬉しけれども老ていふじや神慮
ろふハ其の法ふとひて驚るゝもせぬかとしてわかふて居る何ぞ芸ハ
なれかハア何せふぞむつかふる物ハ何じや　夫といひしとハ芸で
うまう　何じやそのむつかしいと芸じや　本し　サア甚うむり
しうなんかよいかなりし　第て元になひらねども是と申されん
事ことするあまとも芸ら　夫と出て立つてしかし上りて申す　何じ
やてうちしじや　井し　甚てふちうなれちうちうし
第ふて扨こそ思ひ子とれ一人と喰らひて住みなれ　ア哀しやその
子応ふてそれ形との妻なれ分かりますれ甚じ此夏秋なふてひなふ
蓬莱の嶋とやふへ来りて申す面い　是と言ふれ申す大の為申も謎子じや

物ぬ何とうそくて物しや枝に花咲藝ハあれりハうらくて今ハらおけくらあ
主通ハ何とふるゝおぼす　丈ハかてんしく中ぬてゐさう　ヨし合点
しくしゑふて云たしせんりんこものへさぬ極めぬれるとするも是も藝の
失ハあさりしくし中藝てゐさう　ヨヽあさりしくし　ゑへ倩もしそちハ
まの身ハ藝者しや今一度うふりうるれヨヽかなもしし　ゑふ扨もしく
出てふしいぬりや　中〳〵身扨もよふゐさうな　何と雑ぬ中さう　先づ
備果ふふ返て蓬莱乃嶋へ連て往しう係動なうふ狂言しや扨て
連との東に艦ぬ胸く来り　丈の能しひやりす世う　みなとこくのせうく鬼の
謎ぬ天眉に乗せてし　蓬莱乃嶋へ乗りし　何でも返さぬもの世うふ
堪忍なふね天宮うふ一はなりて仕出よ　アヽ哀しやこちへ来ハさうあ
なそ御〳〵　争ふそれ〳〵いそふてふてよりし

次

吃

ヤイ私男己悋気奴の千穀て返て　アヽ免して是れし　と云て幕より出一篇寿亀を返し呈シテハ入
松へ逃り出し来りて出て穀をも合返して来る時とぬる　アヽ誰そもしてあさう扨ぬれしやし　仏とその毒
な友しや　己をも千穀て己もいも死んで仕返う　アヽまて先待しめ
ア扨の様ハ世ふ可来ていつも妃とそしまと退世ふれれ　アヽ何卒爰
さえてえぬれ　イヤし死たぬいては御にいさせぬ色ハ先何とたしけておと
せなそ　丈からハ扨ても出てさうあの男ハ三界をと家として夜泊
日泊りをし渡て家根の漏返りしもさせますの世れ者ハ千穀てふ
ひも死ますの扨さけるも返せてふ十方　アヽ是し其様れむさうしこふてうの有
抱の栗の急度叱つてお頼そふ先待しめ　丈からハ急度叱て出され
出所く嘀きて　両目もうるぬ姫　両目も投れし云て今此御儀の云
前の扨けハ三界をと家として夜泊日泊をして家根の漏返とし右門義に
さうすりと云其様れ泊泊の限りれ来の有物て有中ぬりか　あまりの中
来ありを世るゝに但て玄の様こうそれ丈ハ皆恨てふ存る私の死泊り
日泊をこんなれハ世常をこ大切かねてのぬてうそる私の甫宮ゝ有りし酒井

呑ふて世帯持つ事が一両操いだ私も何うしあの女よい所きまて帰しく
小僧く出て他けしゃ中せいあのちらく々近きてらもしやすの何卒純根
云て了簡なされて下されい 是い遊所へでも其様なて有ふしなりふさ
先方いもて切根云て了簡 丈い示りの途る イヤ嘯こ今夜
夜も言う義い免角吾妹へかあまりてきて云袖に私共料も親里へ戻さ
なりふい能ふ 何口ふ見かへ手としてまい了 中し 嘯様立や
し何しせうそ 抱きてと返せふいらか殺て退ません 故こそ妹らい
口こし以へやあの男斗り男ても有まい袖に外くて先方い能ふ
作らい夕通りなの女よ此男も薮と踏ても女人や七人い跳出しません
らえふ了まてしなまへい身の能ら女くに夜な立ますう 丈い左うと
云ならふてならの何ふ夕まてらさうな何ても切ません 其縁
なりいもふいら嫁人の何ならて手らい十二年と戻せし作らふれて詠なれ
御ら是い先方い出ても袖よ注目義の嫁入の時云てますせて十
二年ゆと是持していふい 何十二年ゆこ少く知なて 丈い咲てつさうて
さふて有ふ 免角私のさつらかなひませぬよ依て云うけ咲技

まいるる何卒云訳を致しなさいまする 誠云訳とはさせられぬ抱しや丈ふ
付て吃し云者い淫い派う抱しやらそ抔さい派い妃か 淫い派ます
先方ふい淫蕩なりつて云訳とさうし先 如何りた其每り
いふく許下さい 御ら是こ手を取りいふてまい淫蕩なかりてく
云訳とせうしいふ袖と聞て女りし先 何も云訳いなさるまいか
あふいしし作ふまいた 心得こイヤ是こ可ふなて言訳とさうしめ
畏てさうる淫婦久エ、腹立やし何の可れ旦那云ますする 是い何れ
袖云訳をしてこ袖こ堪忍とそしてせりし先 丈有ふい是も堪忍と夜
申せし袖に月織旧織と織らおうせと返せしいふて下されまいか 心得こ
淫婦ふ所こ抱てら垂か さうて有し 又云訳とならしやませふ
其通りいふて許下されまい 如何ら嘘こ果こ云ふ咲せしいふなど
もうしこし何ふまいた 如何こ嘘こ扨い云訳とは恥し先
畏て伍座る淫婦久 何ふ猿立やまらこその寸志ふ筆とといふ何として
らまでした イヤ其い是も云ふとくこ提よ可簡とさうしめ
先方ふい是も堪忍い申しませし袖らく十二の月具足とと返せしと云

てトナゝ手向　おゝ謡の名ゝ亦云訳をこすりて有は禍ゟ先是不
勝をこゑこゝ多しめ一心得萬しに　芒く十二月ゟ具足取返世
食も以文云訳をこもとし能　謡君久エヽ膝立ゃし亦けり是ふ於ナと右ゝ
すりり巳并ちら以て退けり　ア、拖面もとし能く　芒ゝ
何としまるそともし逃さりしめ信く気の毒ル夏しね　打の足胃
こよへ物そとふくて其ル屋敷ル満ル出し

子盗人

初心の者子ども抱て拘もし能は孫なり甲子棙武ナり表の口ニ座備へ連而て体もおまとふ中ニ家ニ筱
りと体まかせて打わりは勝手へいて茶を浸て来まとふれと云へ名誉ル是しやでの申る式多満
乃若ひ気を出の合て探捜し一廉の自ル縄ル放て三座連ハ務て探ち節ゆて黄ル
能巳ハ中に及す家一跡迄并返て申すに依て当へ戻るともなし所作天彼は扨之申てぬ珍ニ
世話にも中れとく自ル果ハ喧嘩ニ成り情愛ル果ハ迄ひ彼すより外ハ有ひと中の茶も只今
いもら根の子湖るくてハ彼ら根ニ申ぬ夫舟下ル町ニ誰敢と申て大有徒人ニ申ノ由
お人道具持て来ル足果ら取ちらひて有と中に依て今夜此れへ来り何そ足申
一匙二文も案内申しにそうとかけて来り夫を元ゟに彼所平并迄しと称る趣して加
根の子ハ背り付るゝ能と申に依て此るもふ申る様ニ先起ろりしと来て殊に加根の
る戌彼せハ係ニハおル者ニ成と申ら私ハ中に加根の子ていは申るぬイヤ来様ニ芒し如挧も
し用ゟ炭し此辞所中ニ見ていまくし私もハ所を彼し夫て先家裏ゟに通るよ迄ハ
まく壊の子の合点不ゟ有ことさてハ裏道へ来し所年先家ル係て有ハ後の申ゟ去
ハ祛薦迫一竃しや是を切り中ル剔裏ル座浦て申ゟ此根ル子ゟ有しと抱て錨を用意ばし
ゆらしハ切りてスカしし斬きりスツカりさしハ是をしめとくふメリくくし唱きりし

志らぬ是れ呼ぶて有る所え大猫捌く今此呼ぶを人か皆ま居と云ふて秘耳を立る
しふさ言ひ皆付ぬ志らね々皆付ぬどんなにいらぬ者しヤツトナハア仕
付居る紙出れは倒れたくめれて未味の悪ひイヤ是て小場に有此分に根は粗雑て来るサツト
立去は社是の妻の座敷なや先戸を明て見るサラし肝を潰して逃出し紐の紐ていかぬ先落ぞつ
人かいるかなしは兄て出る人はわすれぬど見てと多くの事すると足手も出ぬ見届て来る是は
さん捕てのほかの猫足出ても見て南蛮やし主も知らぬサラと物もし結構成普請なれ此文
有徳人の普請は違ふたものじや閑かな角通も手の込んだ普請ての有者は社是だまだ
にかけ乃是ら見数々て有是は何じやハア南鐐湯わかしじや風呂釜茶碗茶入物も
結構成道具じや此釜は芦屋て有る又此茶碗は縁ひもなく高麗て有る又
茶入の姿形の志ほらしさ是は何と一色取ても此所かとの元手じやハア武具馬具物
数々の池泥切て共手にむ
も此道具くれるかヤ是小袖の有是はすべて此兄と元金ぬ物しやる何るて是小
小袖を盗てる志らぬ夫は兎も角世間女房の様に慰ふみえ偽てさいは是をとれて
いて女之出ろしとはると云て小袖をやハア是に子を寝させて有是は誰成の初いて御ふる何と
しして此旅人遠ひ前へ寝させて盗てる志らぬ定て乳母めら此子を見たへ寝させて盗て
あの手は猶ふて離談なといふて居ると見へるや用を足るかちりと聞て何しや出
出て懐ろかま抱き出して抱きたヤツトナ梅もしけれ此かは此子しや抱いて中々
乃子は志らぬ者を見ては皆通抱して此和田科は有徳人の子孫有て此む々つけれ者哉
見て能かわいらしい此何そ藝はあらねてくちして見て能かふはひかぶる哉見て梅と
ろれるには藝もしやや余り実る言ふと依て様子みたかは社は盛り出て
やうしと子て此御か此維の文匠して融ろ来るかよる哉いてや煙して
走つて来も手此様て見ぬ御の家園の所此子さへ親の所ては所ねつの御かと復
は呆顔れ人じやそれさは此内此子まれ子をも捨て嘘で中しふ勢して瓶の子は誠白と
いふるかれさは誰成と能此所出ても此子しや兎角何も藝は成合点しかく
枡と藝者しやアノ余念もない顔は盗けそくてすみせのコソリとも思ふて枡と此様に
しやアと実言也と依て又盗様をそるを今夜は肩車か此せて出かしませふ
肩を肩へいふし盗手ぬ肩かのせて盗ていし此所へ来ぬし前もそして家者和子様を表
乃座敷へ寝させおいて此座かくも能は寝ると思ふへて此者は被るぬ来て見てとるも
まれ能ふて盗中此中ります心地しふて肩を指ヤイし表は屋鋪へぬす人々入る此も所は築
かまほは波ますか何るしや表は此座敷へ盗人か入て此子様の此
かくけたるかくへも門を左人をと足せ出合しし是はいかれては足付し出て

そうれ子を膝座へ直　住吉の方へ近る　ヤイおのれ憎い奴の胴切にしてやらふ　此座敷残る拙
に参り御しく　何の為に此座敷へ忍ぶのまで刻にしてやらふ　ヤイ
御前とおさ敷れ私は盗人ではおりない捜しにはいりの此子棟を乳母
か人遊び所へ寝さしましては難儀にまいつてゐるに依て別
此方致て木り御ゐ入　何の子共かる様る胴切にしてやらふ
それはあまりな事でも切せ　夫なくば先此子の
らまりませぬまでの　その子ぢやうらおけ　新いて何とする様じや　さやうならせまた
に斬て仕廻う　乳母ぢ　アイやふじ此先活せまじいよふ其の子が直て向けといふて　言て申せば其子に
さやうならせまじ　子を下に置逃入　憎い奴の横着もの已手で其盗人をとこみ
へて見つれ内やらまいぞ

乳母は泣ながら子を抱上あやし　いかいぬめに合せの命を
有難ますをて寿命長かれといかわ子を今や百
八拾年七旦り迄も生延させまするぞ嬉しや

合柿

是は此所のあたりに住居致す者でござる　いつれ宇治の波方へ柿が大きになり致すと申
依て何卒を譲りておちかたへ参り柿を求うと存る　何卒是に
たり参る　私ましは宇治のおちかたへ柿の大生致すと申に依てそれは波方へ柿を求に参ふては
ござらぬか　是は一段と能口でござりませぬ　さあ〳〵ござれ　参りまするか　今日共
気も能くござりまするに依て緩りと歴ませぬ　申して常も能い所に依てゆるりと廻うて戻りませぬ
イヤ何角云間に上下わ渡てござる此所に休ふて　夫なら能い所じゃといふて　路に座す　私も生なる者は宇治
の波方に居ておるか当年は波方の柿が大かり致ておるに依て毎日数々売に参る又々るも参
りと存る先ず済りしと参ふ識に流石数て参るか様に毎日数て参ても売余いて居ござる
ござらぬ今日も何卒袋を致る求てござる　イヤやあれ柿売が参る様うて見ませふ
夫ならあふござらふ　イヤあふし何かいとれへ参りまする　さらのまでござるが何とてござ
るか　いろもろおれわ事しや其柿は進上物に仕し売ひ給ふ　私は宇治のおちかたの者
売てござるか毎日数々商売に参まする商売物でござる　何しも波方の柿売しや　申し
ヤレおちかたの柿売しや参まするそれは何の方へ参るとも今ござらぬ何と見て譲てには
ござらぬか　是は一段と能きござる　噂く柿売　何ますてござる　私は都の者しやか

りふ彼方へ扇を喰ひ参る乗物より彼方の扇売なるハ皆来りて来て申すと仰せられる
何と云ふて買はれる　夫ハ乗物の中で御座るから乗物へ出して百文と申しても是で百文でも同じ
事で御座るから何程百文取られて其扇を上げて扇を云ふて　トリヤ　さらハ扇を見ませふイヤ是ハ高い
さあ取れ扇じや　イヤ中々是ハ合点が行て御座る　アヽヤレ何程揃ハ流石ハ此素人しやなふ
合柿を持て出るもので御座るが是ハ彼方でも本様りと申て一つ喰れ扇で御座るサア何程揃
先ず百文まで口論もせぬ　イヤ　危角済まぬ扇じや　イヤ何と仕候を申
持て御座るが百文まで口論もせまいぞ　其様ならば柿ならハ此喰うて見よ　私の
扇で御座る　安けれバ御座るが夫てハむかしの無き事もなれ乗物危角何程揃の内で百文まで
見るもせぬ物　イヤ　其ちが喰てもむかれる事で目に見えて喰ぬ事じや平に喰て見よ　夫
ならハ済ませふが是ハ商買抱て御座る故で汲て價を云へ　中々喰くハ先ふ理がないふ
イヤ　危角私が喰ていまします故に仍て一ツ百文まで　持しなひもを以て当
らうて見まけれと云ふ　是非又喰ひと仰せられる　申し　跡で扇の價を云へ
申むまいハ何様なれ見せもせぬ　イエ夫ならハ済まふから是に渡う　イヤ
是を喰て云へ　作と何程揃ハむさとした扇の目利をも出来ぬを見へ渡しは是ハ申て
も一つまれ扇で御座る是に渡しませふ　イヤ　そふむまれ扇をとへ　其様ならハ済ま

せふ　何程ロ中と見まする　心得ました　扱むし　むまれ扇なれ
されハこそ渋さに御座る　見捨て御座る　イヤ中々諸方から扇て御座る来て百文
らまして見ませう　イヤ無さうれ　イヤ是も夫程のもいう扇を吹て見よ　イヤヤ
私もさの商売人で御座る柿を取るのハ御座らぬ　イヤ　さうていなれ
うそ様吹て見よと云ふ事しや　扱扇のことを申しでいふ事まして柿のもので御座る
加様して吹もの　しや此吹て見せよと　一度で御座る　申し　イエ夫ハ私の仕抱て
御座る喰合吹て見せ候を取らせて見よとて　されハこそ去ふ内にイサさらハ去ろ
かるへ参りませふ　夫ハそふ申さふ　さきの待せられ内　何事しや　扱之
買手ハ今の價を云へく申さまし　持つそれハむさとした事じやに様なくハ先ふと
いふ事に価を流れ柿の價が申し難きものしや先つる事ハなり申さぬ　ヤアラいつまでも
此人体にも似合ぬ流石商売人なれ程ハ不申今迄遠慮して　いれ扇と買ぬのみ
おほしかすいろ〳〵とけいふて　あるいふ事で剝かしもう喰たる柿の價をもおさ
あまれといふものあるものから有てさへすまいたらぬ　ヤイ〳〵ヤイそれ出川
ヤア　ヤアといふのまと悦の出川の夫ゆへ元来あまくハ去ぬといふて何と去める扇
ま代抱て申す事抱しや先き中ハなられぬり　見まいハ相此料ハ年をいれ人しやなむ

きとりしこ事をおかしなりまるひらてもおつらなき商賣物を唯喰てよくものゝ價を
やふとたしら見とよ得てこゝに育ても代物をとらぬうちは一寸でも売事て
はなるり　イヤ己は椎茸のおとしらく摧されずとつおつきつをいふ気なるには
為になるかゝゝる　多兵衛もなくふといふゝ何となり　目ふものを見てそ
あるまじい事れか　ソうまでも大勢か　ハア何藻は大勢所をもは一人りしやしおゝやて
依ておしなほうる柔も欲方たゐは口を利ましや　ソうれも大勢あるしともおそくくおづる
椎茸ではおりたぬる　こればきゝいふる　おいうそさゝれる事　悔ろうよ　何の悔ら
多川ら今日ふ物をとりすぐに何までもお鄰役し居らふ手数ならぬ　偽は当川のしく
アヽゆるさせられ奈しく　何茂是へ出て誘われ　以後まし九郎とかやうく此臨者がへせ
かへせ合せ椎　しくとくこともし支持ふ来るの古し人の人癖者椎の本に
偽之て謝を楽して嘯を吹せかし倒も吹りうなふ袖うそれ吹きまぬ
口をかきむしり後悔しつて頭を椎の串をうし小竹しまとを拾ひへ事か浜椎
をかしけて赤ふかへ黒ぬり

昆布賣

是は此あたりに住居致す者でござる某訓用有て都へ登りまする先
そ急ぎしとて参ふ宅に来も世あらうていへ人を數多きてい宿てのござるか
今日は方々へ売まふて主人も居り合さぬに仍て自身太刀を一持てのござるか
イヤ何かしゃ内は是は上下の海道しや先世所に待合て能ふ者も通らう
は調をゝ樹か刀を持て貰うとなる　兵出ろふ者は若狭の小濱の厳
の昆布賣でござる毎日都へ商賣にまゐる我と日も参らしとなる誅に
流石都でござる毎持て参ても頓に賣余して持て帰る事のござる
ぬ何卒今日も能仕合をと致し度事てござる　イヤ何まて仕合致者
かゝ通る羽織がふ哺し出ゝ中　ヤアしあちの者てござるか何事でござる
いゝかも和田料の事しや御尓中ゝ者がにいはどれをかしよう
おかなりゝそ　商売人の来かれいとれをこ主へしやゝ者もござらぬ
點長上ふ法方へし参りしまする　是は忍しや去年から真實志ん
ていよれくおかなりゝそ　去實心さからては都へ出る者でござるか何ぞ法用
あしつるるり　ヤアしふ都へ上るしおかなりか　中ゝ　夫は幸成事しや

身共も都へ上る者じや連ほしうて此所に待合て居る若衆か
なくハいさ御供致さふ　それ幸すれハ御仁似ておぢやる御連ならハ似合ました
某私ハ御先へまゐりませう　イヤ其様に連立ハ似合た連もありますまい
似合ぬ連も有ものじや是非共御供致さう　其儀ならハ兎も角もして御
出る　然ハ御先へしやさふの能者かうへ参らふか　先かようにいたしませう
サアサアおぢやれ　参りますか　拗句に煩と聞と掛
同道致しても他生の縁てござれおぢやらふそ　御作ふ新くなり他生の
縁ても御座るてれのやうにおぢやる　然らハ都へハ何と商売に出るぞ
私ハ若狭の小濱の服のおかふ売りて参る　ヤアし若狭の小濱のめしと
昆布売しやよおぢやるか　申し　扨て其昆布ハ一把にいかほど
事しや　然合のよい時ハ百貫も弐百貫もうれまする　扨此合の悪しい
時ハ壱貫か弐貫ならていならぬ事でおぢやる　夫ハ又聊か目
しかないとして持て居るぞ　イヤ鳥目の事でおぢやらぬ　扨昆布
を壱枚弐枚と壱〆弐〆と申事でおぢやる　其ハ又鳥目の事かと思ふて
御存知れハ御座てゐやる　御初めて逢ふてそなたハいかなる人

世間に成事か有か無ておぢやらうか　昆布売つましに何も御用は
ござりませぬハ云ならう似合申し御用ならハ新り申そう　すまぬハ
御用らしやませで　申し　其様な事ハ先御礼を申さう　御礼までも
うまらぬ　無心といふても列ぬ事でも成されまいと掛かる者なれ
只今日ハ方に見すて売人も居りぬ合さねハ何ておぢやるても自分
おぢやる指し此太刀を都迄持て売ひなれといふ事じや　見ますれハ
結構な御太刀てござる其上御太刀持とぬ指す事か成ぬ是ハ御免なされ
て下されませ　扨々気の者でハ　てや御持しやといふて持たぬ
と云事か有物か　サアサア是非ぢや指しておぢやれ　さ上ぬか作まりゆ世歴
其れ持てもいて有る　是ハ初めとぬか商人ますか　戸亦云
うれひかにハ　然も亦初め扇でも同じ所に入ますか　すれハぬい
唄ていまじ太刀持まいしや迄　取様てハ出かぬか免角ぬかあきませぬ
其ようおかり申す　ハア　某も此あなたてハならぬ面倒かもん気にかれし者
かまハず売つましてまいると云掛云遂なんてしたてハ後難も口惜い然上は
指す様せよ　御亦持まいたとて指おせふかてハいとしい御指申しておけ　先指せ　然る

抱とは　抱と云ふ事なれば　抱と云せいでは　指ませぬ
お指申ますは指と　イヤ持ませぬ　先は宜か　御てあるか　真
貴兄　一定でござる　是はさまでの無太刀と指て置しょうの位じや
サアし持て参上　怖ひ候ふた者でござる　何とお申あるか
是で能まするかんて御ざれ　是はなるほど先は悉皆昆布の名所といふ指
しや　気みやうも申通り　乃ちが経しや申てつかまつれば芸那えもでとと
候ふか　示て参ますれば抄榾の先の明て扉り流しきゝ依て捧もそそと
安心をと申てござる　すれば宗旨のことみにお目申あるへは　左様て
いうまぬ　夫なりはてき昆布と言ふ所ふ何し有ふぞ　皆掛け出ぶかふ
差上て持ますか　中に知示の宝じや　其様なれば余りある指ませう　サアし出れ
お申さし兄は　帰りまして　仏覚へつゝし差上て持て参ませう
出来るかんて御ざれ　中に　何とお指有さか　是で能
能に御臨て指て置ませぬ　是は扨て夫は悉皆進上物とござる根元今度は
まいた　何しお持申しか　有に御添てつかまつるか　中に　おなし
是て能かまするか　是は扨て夫は悉皆

保使いらぬは抱しやすれは真実大方の指様ぞと言ふ姫しみへてはおたるて
お留さいふ是へたくさめ　仏体備へ　物して家名は済なとあれ
又全の事は済候へ指抱しやうの為に来は寛てはなるほど進も持て
お異申なれはいかゞ大きへ指て見さしめ　御機嫌よう　何とお指申なさる
是て能まするか　とれしイヤ投那には指なけぬしきさしり一度とよれ
持振ておかり申た　夢に源次ても知る人におぼ進ぬれ肉やくし大金
有りとも候し作は通れ私の御仏勢よし　善へ申せし　夫は物して　お申やる
サアし　おや手まじし　氣も清すりし　イヤ先にはふは　よろ示て　ほ称に
道て当と指て置ふて　若根元満足成る中はあり承る　指もし悦存
てかまるに何し没きふ　イヤとてもお根から出るとこそ添え候はねば御有ゝさめ　何しきる夫は
ござしもの　こち之捕せ　何のきれ指已引切にしてまいふ　アゝ見て呉れ
それ宗指ぬ太刀でと指てからよれの是の能の己首をと落して申ふ
そ備草らあとと助て呉れ　己命の助りょうぞれ　何の助りょうぞれ
たん手ではよれの一腰をとさうれてゐるまでと抛こせ　何しその一腰をとおこせ　中に
扉れ者は諸侍の腰の物でと申ふか抱のきるまじはならぬぬし　己おこさぬと

なをこいつが非道かしてきをし　アヽきをし　おのれおこせ　つかと
そちへ退ひて居よ　心得た　サアとうぞ　己は心得てゐる根をとすかゝ急げ
て抜きかけ　己其様用心をとすかならばサアとは何そといふて
とり退ひておこさねば詮ないぞ　切かけてきをふ　アヽ恐ろしい
おのれおこせ　扨そちへ退ひて居よ　心得た　サアとうぞ　扨今の先
浮雲な事がなひ　先其方へとは心安き事しや　ヤイ彼か　何事しや
取らするぞ此方は今迄生物を切つたがなひ己をと削切にしてくれう
斬うぞ　汝をと助けて呉れ　胴切りにしてきをふ　アヽ何卒命を助けて呉れ
真實命を助けて呉るか　十　命を助けるならばそれ程にいふならば
出は来まい　足がないは　おのれが謡ふて抜いて面白ふ舞ふて何と仕方
イヤよくの根をつかまへるヤイ己其實命を助けるか　ヨヽ助けてやる
夫ならば此昆布を売られ　何昆布を売らうぞ　扨は己は云居る侍なと
いふ諸侍か昆布売らうか扨しやるならば
云ておふとうふ事は細首をも落ひてもやる　アヽ売りませう　己まつ其事
うまし　心得た扨いま売て見せる是非に及ばぬうりませぬ

ヤイ昆布買へ　ヤイ己が根に云て従う上ふれ　ヤイ是も悪
勢にて見て昆布売れと　若狭の小濱のめしの御肴皆そなえて
アヽ門ヽ昆布は上てられまして根と云て其上にまいつれ己が
根に此様にと云てた上られ損じや　悠悠に見て売て
なふは太刀刀を返すまいか　先は其儘の根によふ　丈夫ならは売てくれ
痛り何と仕か　一段よふ売らし　サアくれ返せ　先おて
何とすか　今のは何とやら平家節に似て平家節にうまし
是は声よけに似て売て聞せん　丈夫ならは売て聞さふよう聞け浮瀬
昆布売れ此若狭の小濱のめしの御肴と云てうまし　其ならいふて
売らふならば今度は返さぬ　扨今は売れ平家ぶし何と仕か
一段と能売らし　サアくれ之せ　先おて　何とすぞ
今此は何とやら小唄節に似て今度は小唄ぶしにうまし　其も売らぬ
仍て売て聞せん　売て聞かせふ仍て小唄昆布売れ　おまふで
さの小濱のめしの昆布と云てうられ　さあ云て売らぬは今度こそ
太刀も刀も返さうか　いや返さふか　丈夫ならは売らふ　まふうれ

やれ〳〵（小唄節に云て売る）何と似合ふか一段とよいは　サア〳〵返せ〳〵　先まて〳〵
なりのは踊節に似たる、夫は躍節になりた是も気まい不て売て渡さう
まふ売て渡せ　是はいかなる事、ならんでな　浮〳〵されてみ
ハまふめせ〳〵お昆布召され若狭の小浜のめしの昆布〳〵、お昆布めさせや〳〵
しし〳〵と云てらま　さうでムる、大方ならぬ声力とた人さふら
中〳〵返さうまいた　是はいかな事も浮〳〵浮てな　すすこ辺浮てしやしや（踊節にて）
何と似合ふ　一段とよみ　サア〳〵返せ　まいまて〳〵　浮雲
事がこさる　汝も二字名乗る者なる、名をなんとそ云ふ、其か〳〵は某か
貴ひ冥加末繁昌と売るかなるとは某も刀も人をなふそ　何と申ふそ
汝か貴ひ冥加末繁昌と声〳〵て名乗るは太刀も刀も返さ〳〵といふ
其分てもよし　夫は寛か　謡しや　主実か　某を朝に綱もそ
昆布売を召し〳〵よ返まいか　召せ昆布かな世めて〳〵数々の若狭の御
代のよろまいふや　何ともちつとも返しまいそ和男　あの横着
者とらへて呉れ　すまいそ〳〵　免して呉れ〳〵

長光

爰に出る者は遠国方の者て御座る、某訴訟の事有て永〳〵在京致す処に、訴訟思ひの侭に
叶ひ安堵の御教書を戴き、此程は方々の見物なとを致て御座る、依て近日罷下らふと存る
夫に付て某国元への土産物をとゝのへて参らふと存る、いや誠に承れは寺町の市て御座るに依て、あれへ立寄りて参ふ
ねる先急て参らふ。いや誠に国許ては在郷なるに依て左様の物ちやうと持
兼て居るて御座る、都て在る物ちやこと、寺内に
是は市場しや、扨も是は賑しい事かな、いや是〳〵つとあれこそ皆市場しやさて〳〵武篇
ゝし売物を見物致ういよ　是は何しや子供の持遊ひ太造らしい物の引連上り小法師
振鼓是は世ふかしい物ちやと御座る何とそ求てもらい心の侭まて（此間の内二丁程で名乗）爰に出る者は
洛中に住居致す心も直にない者て御座る、いつも寺町の市て御座るに依て参られへ参
何そ能い物もあらは調儀致さふと存る、先急て参らふ、誠に今日は人出を致して
御座る何とやら、何そ仕合のよい事もかなあれ、いや是に何者やらあれに者を持て道具を
見へて居る、近寄て見ふ　扨是は何しや茶の湯の道具と風呂釜茶碗茶入茶釜茶
杓火箸羽箒柄杓を並べ又何の作しや是は何しや（唐物）金襴緞子（紅梅緞子）纐纈錦　綾錦
而ふ言れぬ世何とて人の持てゐる者を此様に申そ　大勢の内にしも似てまわるま

以前にも都にあれハそして いやもふ大勢(ヒトゴミ)の中じやといふて是ハおれが中[illegible]のたりぬる
て御座る今度ハ持替て見た所 それハいつもの眉合のかしてかつるとねて御座れ
ハ目の鍔のきら迄く奴て御座るイヤそれハ取ちとへるハ来も取ると称て左ニ度当て見へし
是ハ何しや武具馬具 奴口を流し(糀挖泥得切斗善斗隠ゆとおう九心の作と[illegible]) ヤイ度る者俗しふ人の指ていふ者を佩そ だ世ハ能ある
佩ていふ者ニ目をとも改めり 是ハ其のかしやさうちへおなせ さちへおさせ 其合へ
いかしいし ヤイしも天下治り目出度御代、何ると見つるといふり 私の其力とあ
のおるもふとゆきすさちへおとを 私の佩ていふ者と此の者も度るふと申れ
ることへ仕せ 其ハ出てハ御尓ハさとぬ是を先他世ニ語ける 此方ハとまでいて
御座る 其ハ前の目代ちや 目代及たまてハ御徳を中御座 私も一礼を申走
う イヤし私ハ及ハぬ理非を聞て後く程ニ落語の間先成世ニ語れ 丈たいハ
おりてハ語ますれニ何てし心得ふれを出て下さるれ 心得ました しかも語けれ 成ふ
私の為ニ御座ニ依て語るニハ及ますぬ イヤしいの者も願ふ理非を聞て泣て後
さして程ニ先他世ニ語けれ 丈部ハ心をさわつニ出て下さるれ 中しきるてハけれ
汝ハ何国の者ぢやれハ何ぞと論せらう 私ハ遠来ニ見て御座る許伝のもふて
永ニ在京致し不ニ訴訟思ひの侭を叶ひ安堵の御教書を載き国許へ罷下るとて

御座ニ依て今日ハ左京の市へ(土産物をととのへ)ニ来て御座るハ此れあの者か何かの来
て私の指ている者を佩て私物じやと申ますの丈を申も申しまし上つてのぞみ
目代殿ハ急度御裁許て下されよ 丈部ハ此の者の口をも聞ふ後ニ先丈まて
心得ました ヤイし汝ハ何事を論しまする(アトのいふた事をいふ)是ハ合点のゆかぬ事じや先
丈まて 心得ました ヤイ汝か者か定なしい国作を覚て居るて何といふ
申せれ 私の指て御座ニ何とかふ覚へておりまする夫ハ先備前物で備前友で御座
長光て御座ニも此様て御座るか長ハてし光ハ云ふるゝ書ゝ字て御座る此の者ハ指し
ます御内間て見せ申す 心得たヤイし汝か其刀の定なしハ出所を知ていうて有
う丈(ホドニ)をといふて申せひ 何か折れの太刀て御座ニ依てよふ覚ておりまする(アトの)
ハ千合点のゆぬ事じや先丈まて 心得ました ヤイし何れもよふ知て居るハ此
迄ふ者ふ若か御座るぬ 汝か太刀の定部ハ今度ハ地肌焼文といふて申せれ 心得
ましたる先継え物打迄ハ直焼丈々切先へ来てハくるりと尤乱ニ乱焼て御座る文地肌
物と磨て申か部ハ霜月師走の比落氷の上へ落雪の降ふた様な乱れ焼て御座る
此の者ハ様まゐれといふて見せ申す 心得たヤイし汝か者か定部ハ地肌焼の様体を申せ
聞せ 畏て御座る(アトの)あの者ハねまゐれ問て見せ申す 先丈まて 心得ました

ヤイ〳〵汝か通ふ坊の名ともいふか何とも不知じや　夫ガ私の結構な最前も申通私ハ
田舎者で御ざるに仍て何ごとを申ても差合に申ますに仍て鳥つか呼れて岡松が掛て御ざる
程に拙者ハ太刀の寸尺を呼出し申て何と御ざる　是ハ一段と能ふ　共に上てきつと同松に
申さすハ成破て御ざるに仍て嘲ること私と汲て捕て赤裸に致まして何と御ざる　是ハ一段
と能ふ　夫からハいさらち（御座）　能ふ　寸尺ハ　〳〵　で御ざる
今度ハ寸尺を呼くされ何と被成　早くきつとふて又させ給ふ　能ふ　ヤイ〳〵汝ハ
太刀の寸尺をと云て聞せ　寸尺の　中く（アトの通リ云）　寸尺の　中く　で御ざる　去れはいで御ざる
といふ寸尺か有物か先つ寸尺をと云て聞せ　寸尺の　中く　先丈ハ偽ぶ相て御ざる
ても長光と云ふにも定つて御座て御ざるに長いで先ハひるると書く字で御ざる　丈ハ国俊で合
ふしや寸尺をと云て聞せ　寸尺の　中く　先継大太刀近ハ虫鏡丈ハ切先へ参てハ〳〵
しと大乱に乳鏡で御ざる　添水破で御ざる　去通しや　ぬかしもつれ　能ふ　又地
肌も物は猶云て中さハ桑り佃光の水落状の上へ肩君の弦かつて垢れたる乳様で御ざる　ヤイ己
ハ憎い奴の名を知つたと云て来る太刀を反らとしたな己憎いぬの何ぢやあれを又させ給ふ
名くの物をと射て机り逃す　アヽ免させ給へ　何の様な若者とへ〳〵て
具足連落〳〵満着〳〵

伯養

是ハ此あたりに住居致す伯養と申者で御ざる　近日拙が涼で法
楽が有て私の師匠もいふまじまてか師匠の琵琶ハ此の糸かと見れて申た
三十世の先々年前に此琵琶をと指せられた師匠か由御ざるに仍て今日ハ
あれへ参りふうて参ふとかる先にも入りしと参り（琵琶の來切を借り）旅日に
参るも別段申てもつかぬ奴（名染の）丈年も結くまいに此琵琶をと指せられて
御ざるに依て伯年貸てくれまいかとおそらくハ参らぬに御ざる　安心で申貸て拙度
さらふ形無しめ　先ハ参りし御ざる　身芸か身と成て申さう
是ハ意外な御ざる　丈とふとか申　ハア　是ハ此あたりに住居
致す伯養で御ざる近日拙の涼にて御ざつて私も出ますか私の琵琶ハ
惣くにて参て致に三十世の丈に年前に筈雨まする致す師匠が御ざるに
てよ琴琵琶をと指せられまして御ざるに仍て今日ハ何ぢやへ参り琴琵琶を
かつて参ふとかる先も参しく参ふ毫に涼ハつらし暁以存申て御座
古流家の琵琶ハ私の琵琶より一段とよく聞えて御ざるに依て
あまつて参らぬかハ嘆くと致すまでて御ざるイヤ来る程に是しや

先年同じ事より　若の旅まりアト日頭但供養
よろしからし懇懃にいふ
といふて参るも例ならぬでもござらぬ
此日都の原で参らるゝ私の琵琶は殊にそこ事で役に立ませぬ生れ付
て此さよは慕でよい琵琶をと持せられまして参らるゝ程に何卒貸て下され
なら、前ふござる　此末安心事でござる程に先方伯殺が来て貸ふ
と約束致てござる程にめますが　何伯殺が借に来ても　申し
イヤこれハ其方は清ふ此琵琶ハ入らぬ筈でござるが　何事
妻ハ琵琶さんざんに打まするが訛で参るぞ　さらば其事じや勾当
の坊の所へ参りまして此琵琶をとらせよと云つくる和尚へ先に貸ふと云
て断を云て持参れ　いや申し私が先ておりまする程に私に貸て下さりませ
やはり先ハ居るハ伯殺でいなかいか　勾当の坊此琵琶を貸ませうてござるか
此ハ平家ハ語らねバ琵琶ハ入らぬ筈じやが何として借に来たぞ　私と
入ませぬか併道の琵琶ハ四の糸がきれましたが何としても借に来て
居るる　イヤイヤそれハ先へハ文借し申掛て参る私ハ自身に参ました
に付て何卒私に貸て下され　イヤし私が先に約束でござる程によふぞ
ても私に貸て下され　己勝負にしての此芸に負て負て取とこと云申す

撥して（きめて）是非勝負にの　勾当の坊じやと云て負る事ではなし併
勾当よし　アゝ先勾当の坊何せられ様なら先まで先では伯殺
非かなからふ程にとらへも貸まいぬ様が思ふハ何ぞ勝負をして勝負に
何でとらふへゆ貸しと思ふが何としたもので　是ハ一段と然らば
せふ先丈迄勾当の坊へも何かにつけてさせまする　併勝負
何とするぞ　（秋）歌をと詠ませうか（勾当の坊も詠）　是ハ一段とよふこざりまして
三番申し　何事でござる　扨ては勾当理非が分りませぬに依て
何ぞ勝負をして勝た方へ貸しましてござる　それハ伯殺ハ歌を詠
めふしまするでござるも詠せまして　何勝負に及ふ抱て参るぞ是
非とも私へ貸て下され　勝負と仰るならば何の負にめますする
何私の負にめますか　申し　夫ならハ前ちと詠ませう伯殺が歌
詠むと申事ハ御菊が来りまするか先詠ませう先へよめと御
らましてござれ　お詠ましらしイヤ勾当こそ取らへ先へ詠めと云て
是で参るぞ何とて参れよふぞ　何とて有ふぞ　詠もござらふか
見せさゝ　振上の形して此大人の形ハされハ少しして大勾当ハ門に立

すむしはなしまゐらせう　某ハ一段と然るべし　ヤイ／＼己憎い奴の舌先
をとめて言はせおつて己を掛しくて申す、惜い奴の　ア、先待せらる、若
ても私をとかく言はせまうた　丈が、いまい形でもあの報いを通るまいとか
かれこれの能の有る　其様なハ返言をなしまゐらせう何として通つて参るぞ
何として残すふぞ　私もお思い申さう　庭中に
被下の薬分けの足跡ぬけ、採て被下るを申しかして皆へ目に一寸
し致しまゐらせう　某も一段と然るべし、　イヤ／＼勾当の坊が世の
私をとかく物言はせられて　己は叔さま之憎いなんでもハ脇い奴の
し　負る事ではないヤットナ　ア、先待せらるゝ伯養も先
まて先ても勝負をなされ今一勝負せん　丈が、いはせらるゝ
びなしまゐらせう勾当の坊にもなされうか向てござれ　ア、申し／＼
今一勝負して見せうは是非にふに一致させまして申ますかゝそれ
ふもなしまして　是は何じゃる　先と被仰せ被下てつ参る
伯養は目を尽し、ます。イヤ／＼目はなくいかうしませぬ　丈が、
余乃事をいふ欤　相撲でことしらせて勾当の坊もとらせ

らいしの関をつかまつた　さらば負ほれ申して外にて何がせんと申して
おきまいは角力をとらうと申ますなどを仰せ、なんだ　某ハ一段
と然るべきはふは伯養にさ、せよと仰られう　心得ました　大こ通
いはつまいは勾当坊もすぐ腕のかい被下まいとなま、　心得た
勾当の坊参へ出ませうは　こちらへ渡しませ　某が勝負と致
し給はせう
先つようしてお参らふ　ヤアなんと　ヤア／＼　ヤア／＼
申し伯養は此様な何御参れるとはせ、逃まして　申し／＼
勾当の坊は臆病なたいてござるこちらへおいで参るアト笑て
勾当の坊も見まじ何せよ伯養も先立て負けまい迄も立りもせ
禄夫目をつくへ何にふの事しも今度は飛たる負けし負方迎て
きっとの何とも有ふぞ　某ハ一段と然るべし　申し今
度は負けしとこそ退て参らせう　様子を書夜せらるれ
さい何生届しさ　伯養様しき立へおおれ　心得ました
勾当の坊も此方にて参れ　心得た　伯養は負と世　心
得ました　勾当の坊も負と出させらる、ます　心得て候

こゝらは渋う顔する事ばかり　こゝらへ寄しやれ　ヤア此方　ヤアヤア
ヤアヤア　是は何しまするぞ　ヤアヤア　とんと離ふて　あへ〱してアトの足越りて出す
能ともしました私の腑まして樋よ琴琵琶と私に貸て下されんれ
其の衛さんつま琵琶とても借りまするぞ　是れ此
ヤイヤイ来いと無二にうろうろしまとして　いとしくも貸ぬ事はならぬ
ぬかそ

地蔵辞

我は佛と思へたし〱人は何とも思ふまいらん　是は坂東方の此寺で申ゐる
来まさ上方と云ふ者　哀れなる修行に此度思ひ立つ都へ出て夜かしこ試
一見致し度より西国迄も廻国致さんとて行る先を巡りして来る
處に皆人の申さるゝは若ひ内指と致さる事は先ひての物語かなひ
しやさるも〱御仏でふし思ひ立てつる是は此所中程も来りぬよ
日の暮るゝ無さうなに在所はなしとも知らぬ　イヤあまりに火の光りつるん　ゆるさ
らいあまりへいて声とならしし〱る是し　なさ〱ば跡の宿で声と
えらふ拙と申す事ぞと致さい　イヤ来る程に是に高札のあり誦して
〱何と此者の者宿貸ぬ事禁制其は此者住来の者と申せい
家ホもさの者でうむ〱ふ何としぬといふ　イヤ知らぬ体で案内をと乞ふて
なるね申し案内申　イヤ表に物申すとは誰そと申さう
囉齋申さふ　イヤ此所は此家は囉齋などと云ふ物の案内とも物
〱日暮に迷ひ出て旦暮に一夜の宿と借てこれ　近来安からぬ事な
未し夫宿の人に高札のあり状あるまいもの　イヤ此方もせ方んで

此所の大法で方々の旅人に宿貸す事堅く制して有ります
其大法はさりながら此老若の者の事でもあれば依て何卒
一夜の宿を御貸して下されい。 イヤしかしいか様の事でもならぬ事でおりやる
すれはとふ有てもなりませぬか ハテ扨不便な事と申せども叶ませぬ イヤ
出家ならは何かと申すは是非もない事しや 僧に皆変へては如何で御座る イヤ
私も宿を借りさへ致せば宜しう御座る 誰しや 私て御座る
何事しや 出家でも宿貸さぬか 此所の法て御座りまするか何卒此笠を一夜貸して下されい
夫は扨々何の物しや 夫に依て味法料の此方へ指て置て下されい
成程夫で御座る 私は出家の事にて此笠は師匠の形見でも御座る 依ても宿しませう
是を其御方へ渡ましても苦しう御座らぬ 依て何卒一夜貸して下されい
成程はさ様で御座るが此笠は御坊の道より譲られし笠で御座る 依て両宿ならぬ
是は何事で御座る 是非と此笠を一夜借りまして申し 是非其御方を
頼みまするで御座る 其儀
なりませぬ 是非とも御頼み申す あれは扨々
なりませぬ さらは
出家の身に取ては 夫ならは御貸し申さう 此笠は御坊の
持ちなされた宿を借るに依て何事も苦しからぬ事で御座る
此老若の旅人は何方へ参られた 我等は宿を借りたいと申すに依て
宿の者もなく申しませぬ 彼是と申せば盗人に成りて有る イヤ中々
案内なしに這入て参りませぬ
出家の事 イヤ是非に及ばぬ 宿を借る事はならぬ事で御座る
物か 一夜の宿を貸す事は成らぬ 笠は其方へ預ける
なれども宿は貸さぬ 此笠の下で今宵一夜は雨露を凌ぎ笠を借る
ふとした事で御座るに依て何事も苦しからぬ事と云ふ
夫ならば笠の下へ寄りて寝る事は何とする
とらせ 出家ならば宿をもとむる 是非もない
出るは出家の身で御座る 彼是と申す 大法を破て宿を貸す
さふしてゐる イヤ嘸々御出家 何事で御座る 大法を破て宿を貸す
宿かりし体しめ 言ひ分で御座る 大法を破て宿を貸す
尤もしかし 扨其方 是ては 最早 寝られぬ
イヤ扨夜更の雨かな 南無阿弥陀仏 帰命 西方にや 申しませう

先ハ、左程ニ存ずるが何とて無益と申ぞ　出坊ハ何と云ふぞ
おそ　新発意ニヤモし　イヤ勤めも致さぬ　ハア勤めも
致さぬ無益な　申し　太郎冠者ハ又此りし申せし能ふ仰られた先刻ニ
てつかひまする何とて江酒と一ツ申さうふしなる　イヤ嗜しはせぬ　何と申せ
存し申ますほどに　其ハ某ても存ずる　何より先刻よりも
何より今私ハ出家さうも成る何とて江酒を云ふ申さうふと嗜て来た
是ハ近来宗ふハ云ふ私ハ飲酒戒と云ふ物を嗜る故て
酒と云ふ物ハ無益ぬ　何の飲酒戒と云ふ申す　申し　供ハ夫ハ
当時ハ先哉や先刻ハ取り捨て来た　先立と云ふ迄て来
ろし　夫ハ有る依ての事てつかまる先こちへ寄せ　御坊ハ　扨
もはや今も申さう私ハ飲酒戒と云ふ物も有る依て酒と飲まず
まいぬ故ハしし申せハ若者しなが今申しつかまる　寒ふ吸ふと云ふハ
若しハ何るまい出家ハ三ツ吸ハしめ　其後ハ吸ませふ
身共ハ成と吸さうふ　是ハ実ハさう来る　ちよとし吸しめ
ヨ、ちよとしつかまる　御酒でもしある　さらハ吸ませし　夫ハ

能ふ　扨も能様成江酒てつかまる今一ツ吸ませし　いや彼も吸しめ
最早ハてあるふ　是ハ度々宣ハてつかまるヨ、又ちよとしと申さう
又ちよとしある　供ハ能様成江酒てつかまる江度て忘さうて忘
来ハし供てなし　其も来り居るを取らう　来も無ふハさう取ませし
若後ハ取ると成し申せし　先刻ハ又何ハ又と申され方　ちよ
ました　ヨ、ちよとしつかまる　寒ふてししつかまる　扨一ツ吹
扨へ申さうる何ぞ肴とも下され方　姿形中継でとよみませし　夫ハ
何と江の肴に成る物てつかまるぞ何ぞ小歌など舞せしまゝ迄
らハ教申せし謡ハ謡して下さうか　小謡　いや申しし　江謡ヤンヤ　さらハ
小謡　当時に又謡ひ申せし　戴きませし　扨謡せし参方　心得た
了簡ハ入る私ハ吸ってつかまる　其迄てつかまる　供又是を
致し申せし　是へ下され方　赤ふとなしませし　謡せハ
まゝ迄　心得た　小謡　上下の酒盛に成ましてし　寒ぞ上下の酒盛ハ
おそてつかる　扨も丸於ハ後り絶してたる申せぬに何て今ある
先ハ日と舞せふ方　夫ハ去れ私ハ能合ハ舞ひつかまる是とと舞

まゐらせう程に此方へ難有て御ざれ　何と云ても申ますかッ　地蔵菩
さらんまいらしてと云て走り出て参らう程に、さらは爺ゐせう　長く云てやるか　中々
大方先帰りて騒子をせう程に、さらハ爺ゐせう坊　それはさて　地蔵
舞御ざれ云なし　地蔵菩薩とあらまいらし　地蔵乃住所ハ迦羅陀
山、安養界地獄餓鬼畜生修羅人天に山都卒天廿四日に廻て衆の
深き元生を錫杖をこれ返しハ数つてハ三途川参りて帰りてハ[illegible]
より昔釈迦大師の切利天に坐て法説法の時長地蔵坊と召れて承も
如来の御告給ハ末代の衆生を地蔵坊がうけたまハりと三度迄さうすの菩薩衆の内
地蔵坊也　末代の衆生を地蔵に預け置きし給と云て我方を守り無
也し誰もの人々の家にて菓一坂も忘ハ草の上も同じ大地蔵坊法花
菩ハ参りて居の物で十盃三升八て十盃三升八て十ひ盃縁日ニ帰せて廿四日も九
参ふうま迄ハ糀の也ヵ同じ上りたりへいよろし　其の方へいよ何しよろし
しとよろめけハ慈悲の深せきいへず衣の袖をこ顔にあて衣のそこ
顔をいてハ六尺の地蔵ハ酔泣をしてとおろしせし　キシリヤイヤア

金津

始アト出て在田舎の者てござる　某の在所ハ指ての事て一宇の持仏堂を建立致てござる　未だ地蔵を安置致さぬに依て在田舎の者てござる程に仏師をたのまうと存る　何を申ても仏師の在所ハしらぬ程に都へ上り仏師のござる所を尋ねて求めうと存る　某ハ仏師のでござる　是ハ仏師の事て地蔵を求めにまいつた　扨ハ一向在所の持仏堂へ安置いたす地蔵を造てくれいと云　仏師ハ引受て　明日参れと云て帰る　扨仏師ハ下心有ての事てござる程に何とせうぞと云て思案して　アト引込　仏師ハ幕へ向て呼出す

嗚呼宝法師か参られる　咲せうとハ何をそつ仰る　爰ニ用乃
事の有先へ参て急せし　諸まし　先　我乃者と申は別而来ても
なれ在田舎の者、地蔵を一体造てもらへし願来し程に私ハ地蔵ニ成
て居て呉う先　最ていつ在所へ参てハ居る事の成ますまい　夫ハ
気遣ひなされますな神仏の集る場所ていて連て帰ふ　其儀ならハ参り
ませうが私の申しハ物を申さうし　扨何か出たら別物を申して何程
しれそ　弁慶の人形の様にしつ坐る　易ハて弁慶の人形も出ますか
似合にし参う　気のまゝも申してやる　扨ゝ其の様も申して程に
先是へ参て能様にせうし　先　最て法花経を何とし爺ハ能ござる　中々

然ある中ヶ追付て閻魔堂へ来ルサアノ\おなみましてまするし
偖あちへいくなら定て名との物と仰ゆへて有ふか必溶しますれ
皆ていらぬ　其上物と云ますそ　やゆりしく　イヤ何角云閻魔堂
やみ御しめ　畏て　さる運ても元へ　偖是も纏と掛て先
然ある遊とも程も物と云ますそ　何か故畏てさる必遊で来て見
親へて御同宮の入中ヶ満分てさる遊も来ふと遊る成仏にの二く上るアト正面中へ
れ合ひ仏師かわ子敷て説ハ引込アト仏師の極出て何ふおもとちげて来ふし云て頁てさういふハ意で店内ふ定
殊む故こうかいしく　よふ出来さうふい頁まして
て皆の若衆か今々と活業て居るて申ても御かも出面と勤ふて　なれし
悩情ふて此ふハイヤ何角云閻魔より出すさらば先仏地蔵ことを新ハ出へ悩
せノ　其中にかかろして纏とお取らせて是ぞ一段しよふ御座るけふハ皆の衆も出て殺と設
さとふしなかるかし　御まいもらゆるか　是かわりますか　満んまし
仏地蔵こと造てめつして有り満しいて来ていえんであまへいて深と当
あま上内　お待え満しく　乾り目付役の方へ過りて持お奴へ　故しらかしいよゆ仏地蔵て
仏蔵る　故前御の名ふよせて金沢の地蔵と名付けませふ　よふ
しをりませぬ　まづ仏地蔵へ幸初仏待へませぬ　まふ上させられ為
然比満して　又もなとしい元の二方に居て　金沢の地蔵へ馬鹿とこて能く来らせられ
香箕ともやなり膳飯てそい喰へてるまし　イヤ中仏地蔵か能仏仰せらまし
まれる　うみしてい居る　膳飯か喰ひ成し仰ふましますか　夫様
ふ仰ふれましかな　併しあふ仰来てい居る多なて上させ物
此乃ました今金沢乃地蔵へまんい及とこて能く来らせられまし
ふる酒ってそい呑つきまれ　イヤ扨ふか酒か呑たし仰せられます
おい寄りていぬる　まふ上させられ　よふ是ひし
古酒なとこて能く来らせられまし　よふ是さし来しして参るせそ
いかなあるつしかしるゆし　其古酒のあまりにとこいつつきませぬ
生あるふてふ居るに　まづ了能い来ます　是はとんさ外でさする　皆ぞ故
又三尻より砂を豆てヨモアトへつ小謡　中し仏地蔵か古酒よ酔いせられましてまへ
取是して二三度砂を豆図シテ尻へし祇る
満しかて御喰か出ますし　中にての外祇ふせられますか出き
併てか居ろに仰て仏地蔵比ちしらかし満ぢふ　是はよかふ比ふ
いつすまし七是へ呑ふせられまし　お待え出して知　金沢の地蔵比油
ふいてこと云満し事し　御乞御殺しなさらすましとも旦那の仰なくい

さいむちん付しやかのふよ　会津乃地蔵ハ身ハいつもとんなんなく
身ちなふになきとちミとも身なの体なりむけふいちん付しさてしよ
この里乃地蔵の踊つくるを見まいらし　踊りなしになりれ
よ西旦那の体なりいけふむちつし踊らしよ　会津の地蔵の踊
いくつ成る南なし　踊りなしになりきちミしどこと旦那の任なら　い
せとふいちつしおとり給ふおシャキリイヤア

大日本帝国図書印
日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan